

僕の親父は転生者らしい

地底土竜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

僕は海渡町瞳。海渡町再二という“転生者”の親父がいたが僕が5歳の頃に『ヴァンデンライヒ見えざる帝国』という組織に殺された。

それで親父を殺した奴らに復讐するため親父が『BLEACH』と呼ぶこの世界について彼が記した資料や親父が僕の強化の為に作っていた装置とかで、子細は省くけど色々な訓練を積んで6年。漸く復讐作戦の第一歩を踏み出そうとしていた。

目次

仮面の軍勢篇	
新天地へ	1
仮面の軍勢での日常と未来の知識	9
虚化	17
虚夜宮強襲篇	
会議そして決行	26
失敗	33
決着	39
再生	49
尸魂界争乱篇	
影より出る者達	57
未来の因縁と未知の領域	64
未知には未知を	73
叫谷落とし	79
虚圏乱戦篇	
天蓋の下で	87
番外篇	
二章までに登場したオリジナルアイテムとその周りの設定あと短編	98
三章ローズ視点、各隊長の状況	103

仮面の軍勢篇

新天地へ

転生者というのは親父によると別世界から生まれ変わってやって来た人間のこらししい。その世界ではこの世界の未来を知ることが出来るんだとか。その知識は膨大で勢力とか能力とかいろいろ分かる。不思議な話だ。

親父は「ソウル・ソサエティ尸魂界」「ウエコムンド虚圏」「現世」というこの世界に存在する三つの領域の内が一番親父の元の世界に近いと言う現世に霊能力なしに生まれた。

それで浦原喜助というすごい科学者に未来の知識をダシに協力してもらって何か色々やっていたんだと。

それで得た技術できょうごく叫谷というさつき話した三つの領域の外のガルガンダ黒腔にあるよく分からない空間を魔改造して作ったのが生まれてからずっと住んでる僕の家。親父が死んだ時ように遺していた手紙によるとそうそう見つかる場所じゃないらしい。

それ以外にも色々（親父が・というよりは殆ど浦原さん作らしいが）作っていて便利なのを一つきり挙げると汎用霊子利用装置だ。これはちよっと霊子を集めることが出来て足場とか作れる。理屈はよく知らないけど。

そういうのを上手く使うための試練を親父は用意していた。試練総数256個、めっちゃ多い。しかしこなさなければならぬ。全部終わらせないと僕が外に出れないからだ。親父が開発途中で死んじゃったからそれを作れなかったし未完成の試練もあるんだとか。

6年でその試練も残り一つ。

これまでであった試練の内容は霊子の足場を使ったタイムアタックとか霊子で作った盾で一定時間攻撃を受けきれ等様々。

僕自身の霊力や霊子利用能力はかなり低く、汎用霊子利用装置を使

わなければならぬ。

そして他に試練に必要なのは親父が遺した擬似斬魄刀。製法はまるで理解出来なかったが斬魄刀に似たものらしい。

1本1本の能力の幅は狭く威力も低い。しかし無数にある。どうやら僕以外には能力を利用することは出来ない専用のものらしい。

始解ではほとんど能力とは言えないぐらいの出力しかだせなかったり（風を操る能力の場合埃すらまともに動かせない）、卍解は斬魄刀の屈伏なしに利用でき、霊圧の上昇の倍率も低い。

これは本当に斬魄刀か？ と思ってしまうほど本物からかけ離れている。本当にぼいだけのようなのだ。

あと最も重要、親父を殺した『見えざる帝国』^{ヴァンデンライヒ}という組織について。それは全員が『滅却師』^{クインシー}という種族で構成されている。

『滅却師』は死後人間の魂魄が悪霊化した『虚』に対する耐性が無く、『虚』の因子を取り込むと基本死ぬため『虚』殺しの技を磨いてきたが彼らの殺し方は虚の魂魄を種族名通り滅却してしまう。

この世界は『虚』であれ魂魄を循環させて回ってきた為そのやり方は認められなかった。『虚』を浄化し魂魄を回す死神と敵対し敗北する。それからは謎の技術で彼らの本陣の“尸魂界”の影に空間を作って潜んでいる。それが『見えざる帝国』。影を使って様々な事象を監視している。

親父はその影の監視に見つかって殺された。

知ったのは大体これぐらいだ。詳細まで語るとなると時間がいくらあっても足りないので省かせて貰う。

これからの方針はある程度決まっているがともかくにもまずは封印解除が先決だ。

「卍解」

声に合わせて辺りの地面に抜き身で突き刺した擬似斬魄刀へと意識が拡がり繋がっていく。

霊圧は跳ね上がり押された大気が薄らと風を起こし始める。

総本数516本もの刀への意識拡張に軽い目眩を起こしながらも全てを従える。

「はあ、取り敢えず第一段階成功」

試練の起動条件は間近での急激な霊圧上昇。つまりは卍解だ。これは昔挑戦した時に全ての擬似刀を卍解状態にしなければ開始出来ないことが判明している。

卍解自体は簡単に発動できるが面倒なのは制御。能力が多いのは便利だが多すぎる。最初の頃は発動と同時に失神していた程だ。

発動する数を絞る練習から始めてちまちま数を増やしていつて6年目にしてようやくここまで漕ぎ着けた。

試練時は専用空間に移動する。最終試練は戦闘形式の

ように広い空間には無数の霊子砲（内蔵されている汎用霊子利用装置で集めた霊子を収束して放つ単純武器）が僕を囲むように鎮座してある。上には、剣とか何か色々あるが霊力兵器じゃない気がする武器がたくさん。これがさつき言っただし何度も見かけた作りかけの部分とやらだろう。

手紙には『見えざる帝国』に見つかるのはもっと後の予定で本来超絶安全なこの空間で自身で稽古をつけてテストとして試練を受けさせ、みっちり鍛え上げる筈だったがそのための設備がまだ完成していないとか未練が書いてあったが多分これはその一例だろう。とかこれまで含めて搦め手系の迎撃兵器が少なすぎた。

呆然としていると爆音を伴って霊子砲が殺到しているのに気づく。気を取り直した僕は11本の風属性の刀の力で全ての刀と自身を空へ打ち上げ回避し雷属性2本の雷撃を適当な砲筒目掛け放つ、が。

煙の中から現れたそれにはほとんど傷がない。

霊子で周りが覆われている。霊子バリアーってことか。

飛んでくる攻撃を風で避けながら次は火属性の9本の能力を組み合わせ巨大な火炎球を叩きつける。

え!?

砲筒達は火炎球へ攻撃を集中させ打ち消した。

無人なのにここまで出来るのか、雷系は着弾が速いが本数的に威力が足りない、炎は遅い、なら。

直接攻撃系2本を手に取りそれに攻撃補助系10本で切断能力を引き上げ、風で高速接近し勢いのまま突き刺す。

刺突は盾を貫きようやく1基撃破する。

そこからはその繰り返し刺して、刺して撃たれては回道系で癒しまた刺す。

脳死脳筋戦法ではあるけど物量に押されているんだから考えるだけジリ貧だ。

疲労は大きく剣を支えに肩で息をしていると空間の端に新たな空間への入り口が現れた。

あれが外への道か？　ようやく出てきてくれたか。

今外どこと繋がってるんだ？　と顔を出してみると黒い景色が一面を満たす。

これは黒腔？　マニュアルに載っていた現世への行き方は、
■ 確か
■ 霊圧遮断車が要るんだっけ？

霊圧遮断車とは名前の通り霊圧も遮断する機能を持つ車。親父が死んだ日に鍵の空いた地下最下層に鎮座していたものだ。鬼道代行装置という霊圧を込めてボタンを押すと鬼道っぽいのが出る奴があるんだけどこれの中にはそれが何個か内蔵されているらしくてボタンを押したら透明化出来たり、黒腔に道と扉を作って現世に渡れる。と親父が作ったであろう現世に行こうマニュアルには書いてあった。

100本近くの空間干涉系の刀の力で全ての斬魄刀を何とか押し込めた霊圧遮断車を走らせて現世に到着した。

視界の端から端まで風景がある。広い。

まずは浦原商店へ行って虚化を使えるようにして貰おう今の僕の手では戦いについていけないだろうから。

近くにいた人に訊いてみたところここは空座町付近にあると言われたが指された空座町の位置がかなり遠い、家の周り100個分以上は離れていそう。現世は家の周りの何万何億倍とかそういう途方もない広さをしていっていると読んだ。それからすれば短いのだろうけど僕からすれば十二分だ。本当に車があつてよかった。

車に乗る練習も試練にも存在してそれだけでかなりの時間先に進めなかったのだからあまり良い印象は持っていなかったが今はそれを詫びたくなるほどだ。

考えている内に浦原商店に到着する。

車を適当な場所に停め、店内に入ると見たこともない商品達が出迎えた。

これが駄菓子。美味しいって聞いたし買って帰ろうかな。いやそういえばお金は部屋に置きっぱなしだったような？

「そうツスねえ、アタシのオススメは。」

「！」

振り替えると見知らぬ内に背後に男が立っていた。下駄に帽子に胡散臭さが擬人化したような顔面。

「この特徴は知っている。」

「浦原喜助さん、ですか？」

「昔は尸魂界の軍部、護邸十三隊の頂点である隊長に務めていた世界を揺るがす大天災、目的の人だ。」

「ええ、そう言うアナタは海渡町サンの息子さんツスね」

「はい。初めまして、親父からお前に虚化は不可欠な上未来知識を伝えてある奴だから話を通しやすいと聞いて来ました」

「妥当ツスね。ついてきてくださいここは駄菓子屋なんで込み入った話は中ではましよう」

前にならつて歩いていると浦原さんが声を発する。

「1人で来たということとは海渡町サンは」

「はい、死にました。見えざる帝国に見つかったらしいです」
「そうツスカ」

表情は見えない。親父と浦原さんの仲は知らないので予想もできない。いや仲を知っていたにしろ予想なんて出来はしない。僕が外に出たのは今が正真正銘初めてだ。親父以外の人と話したのは道を聞いた人と浦原さんの2人だけそんな僕に一体何が分かるというのだろう。

地下には広い平地が広がっていた上の建物と比べたら圧倒的なまでの広さだ。こんなに大きな空洞があるのなら上の床は抜けたりしないのだろうか。いや、そんなことは置いておいて。

「何ですかコレ!!?!」

一際目立つ巨大な構造物がど真ん中に鎮座している。

後尾には巨大なロケットブースターみたいなのが、先端には巨大な砲身がついている。外側のアーマーは僕の車の外装に似ている。

「おお、良い反応ツスね」

「これは海渡町サンから頼まれていたあの人用の乗り物ツス」

「ただの乗り物にしては大仰ですね。一体何のためのものなんですか？」

「黒腔の展開と透明化による一撃離脱を目的とした強襲型砲台だそうツスよ」？

「これはもうアナタのものになりますね」

「これが・僕の・」

乗りこなせる気がしない。

「はい。操縦マニュアルは後で渡します」

「それじゃあ次はアナタの一番の目的の虚化を身に付けましょう」

「確かな必要なのは滅却師の光の矢と人間の魂魄、虚の魂魄でしたっけ」
「そうツス。どうぞ腕を出して下さい。まずは虚の魂魄を注射します」

懐から注射器を取り出しつつそう言う。

注射。聞いたことはあるが実際体験するのは初めてだ。血の中に

異物を流し込むためのものらしいがそれってかなり怖いことだと思う。

渋々と腕を出すと

「注射は初めてツスよね。でも安心して下さい。アタシ、ある診療所の開店に関わった時に痛くない注射の打ち方調べておいたんス」

二度の注射は一瞬で終わった。

本当に痛くなかった。何で？ 確かに刺さった筈なのに。

「これで虚化の弊害の魂魄自殺は解消しました。後は平子サン達仮面の軍勢に引き継ぎましょう」

「仮面の軍勢でも彼らって結界で場所が分からないんじゃない？」

「どうぞ、有昭田サンの結界に用いられている霊子を探知する装置ツス。平子サン達には既に話は通してあるんで結界の近くまで辿り着ければあちらから開けてくれるはずですよ」

「何から何まで、本当にありがとうございます」

「いえいえ、アタシも海渡町サンの知識には助けて貰ってるんで構わないツスよ」

仮面の軍勢を探して空座町を一時間程ぐるぐると探していると

「あ」

ピピピピ、ピピピピ、と貰った装置が音を鳴らす。方向を示す針は廃屋群を指している。

辺りはもう夜でそこらにはおどろおどろしいけはいが立ち込めている。

辺りに車を置いておいて隠れ家を探していると

「っ!？」

見えない壁に顔をぶつける。

「ここか」

中に入るにはどうすればいいんだろう？ 刀で切ってみるか、壁を叩いて来るのを待つか？ ん？

突然、眼前の空間に巨大な円形の穴が出現した。中を覗いてみるとそこには大きな建物が1つ。

これは入っていいってコト？

扉を開けて入ってみると2階から4階までの床の6割ほどが削れている内部のあちこちに仮面の軍勢が点在してこちらを見ていた。

正面上に立っている帽子を被ったおかつぱ頭の男、平子真子が声を発した。

「お前が喜助の言うところの虚化の制御がしたい言う奴やな」

「そうです。あなたが平子真子さんですよ。でもどうやって分かったんですか？」

入った瞬間からかなり警戒の色は薄かった。浦原さんからの通達があったにしろ本当にその人物かなんて分かりようが無いのか？

「そりゃあ霊圧でや。もしかして霊圧の探知方法知らへんのか？」

何それ、そんなのデータにないけど!?

「はい」

「難儀な奴やな。まあええわ。同類のよしみや、まとめて教えたる」

気前良いじゃん。文献通り良い人だな。

「ありがとうございます！」

「もう日も暮れとるし特訓は明日からや。他の奴らと顔合わせて明日に備えてしつかり寝とき」

「はいー」

最初の一步目は順調。この調子で最後まで走りきる事が出来たら良いんだけど。

仮面の軍勢での日常と未来の知識

スーパーひよりウォーカー。動かすことで靈力を損耗させることで相手の靈力量を測るための装置だ。

3日続けることが出来れば虚化の修行を始められるようだ。それに僕は1日で倒れてしまった。流石に低すぎるとのことで基礎からしっかり伸ばしていくことに決定した。

それからもう一月。

「てえい!!」

駆け、右腕を全力で振り抜く。しかし直撃したはずの相手は微動だにしていない。

ここは仮面の軍勢の根城の地下にある巨大な空間。

日々僕が訓練を重ねる場所だ。

斬拳走鬼の適性を調べたところ斬と拳以外にはほぼほぼ適性が無かった事が判明したので今はその2つと、戦闘における状況判断の仕方等々、初歩の初歩から学んでいる。

「拳への靈力の集中が甘え! 全く響かねえぞ!」

相手の白髪の男は六車拳西。浦原喜助や平子真子、愛川羅武、鳳橋楼十郎等と同じく元護廷十三隊隊長であり、仮面の軍勢の一員。

僕に訓練を施す人は日替わり交代制で今日は彼が当番のようだ。

短気な人だがこと訓練においては仮面の軍勢で彼以上の人はいないだろう。

何しろ真面目だ。それに僕に適性のある斬と拳を得意とする人でもある。

「はー!」

今行われているのは拳の訓練の初歩。

拳から腕、連なる全ての筋肉に靈力を通し、振り抜く速度と拳の硬度を上げ叩きつける。

僕は靈力を利用する行動の全てが下手なので、これだけでもかなり難しくって難航している。

「瞳、今日はお前とハッチが買い出しの当番だったろ」

「そうですね」

「一旦区切るから行ってこい。昼飯を食い終わったら続きだ」

「了解です」

10分程歩き辺りの民家が増え住宅街といえるあたりまで来た頃
「どうデス？ 今の生活は」

桃色の髪をした巨漢、さつきハッチと呼ばれていた男、有昭田鉢玄
はそう切り出した。

「うーん、そうですね。楽しいですよ。1人の時は虚化以外はもうこ
れで頭打ちかなと思っていたのにまだ先があることが分かったので」
「それに1人でもなくなりましたし」
「そうデスか。それは良かったデス」
「ええ、本当に」

他の人と共にいられることは楽しいことだったのだ。親父がいな
くなつて以来、忘れていた感覚を思い出させてくれた。

「そういえば、皆さんって食費はバイトで稼いでいるんですか？」
「そうデスネ」
「バイトって確か僕みたいな歳じゃ、まだ出来ないんでしたっけ？」
「ええ、少なくともあと5年は必要かと」
「そうですか」

何か他に出来ること無いかな？ 家にあつたお金は現世じや認識
さえされなかつたし、借りばかりを作っているから申し訳なくなつて
くる。

空座町の商店街が見えてくる。

ここまで来ると人の往来も流石に多く杖をついて歩くおじいさん
からよく目立つオレンジ色の髪をした子供まで多種多様な人達が
ごった返して、オレンジ色の髪？

もう一度人混みをよく見ると

いた！ あれ、もしかして黒崎一護じゃない？ 見たところ6歳

ぐらいだけどあの髪色は二人もいないよな。

となると横にいる母親らしき人が黒崎真咲か。

親父作の年表によると今は見えざる帝国の王ユーハバツハによる混血、並びに虚混じりの滅却師の力を奪う聖アウスヴェーレン別の三年前になっっている。

本来の未来では、その日にあの人や石田雨竜という滅却師の母親片桐叶は死んでしまう。まあ親父がそこら辺の話はもう浦原さんに通してあるからそんなことは起こらないだろう。

僕としては少し羨ましくもあるが悲しみが少ないのは良いことだ。

それにあの黒崎一護という少年は親父の文献にも散々書かれていた通り戦いに向かない子らしい。

だってあんなに優しい顔をしているのだから。

「どうかしましたか？」

「え？ いや何でもありませんよ。お弁当屋もうすぐですよ？」

さっさと行っちゃいましょうよ」

僕は一体どれだけ硬直していたんだろう。有昭田さんいい人だし、まあ気にしないでくれるか！

「はい」

よし、思った通り本当に気にしないでくれたぞ

いや、未来知識の話は何時かしないといけないんだった。隠す意味無かったな。

今日のお昼ご飯の時に皆の前で言おう。信じて貰えるかな

ご飯って美味しいな。この唐揚げって言うのは特に絶品。霊体は食事を絶対採らなければならぬ訳じゃなかったし、そもそも俺の家ご飯置いてなかったし知らなかった。

一旦それは置いておくとして、始めるか。

「あの、皆さん」

「どうしたんや瞳。弁当に髪でも入ったんか？」

えい！ 何それ弁当ってそんなことがあり得るの!? 聞こうか？

いや、主題を忘れるな。

「いや、僕の父親の話をしようと思ひまして。自己紹介の時に親父が死んだこと。殺したのが滅却師であること。僕が滅却師と戦うために天敵の虚の力を得ようとしたことは話しましたけど。それ以外にもっと重要なことをまだ話していませんでした」

「重要なこと？」

「はい、世界を左右するぐらい重要です」

「えらい規模が大きくなりおったな」

「僕の父親は未来の知識を持っているんです」

「未来の知識い？」

「俄には信じられねえな」

それはそうだ。というか僕も実は信じきれている訳じゃない。

「でしょうね。だから僕が絶対に知らないことを今から何個か言い当てるて行きます」

これはこちら側の確認も兼ねている。合っていて欲しい。でない前提が成り立たなくて詰む。

「まず、平子さんから」

「始解は『逆撫』、能力は相手の感覚の反転。卍解は『逆様邪八方塞』、能力は敵味方の認識の逆転。どうです？」

「当たりや」

おお、平子さん超絶驚いてる。

それはそうだ。始解、特に卍解は隊長の切り札で本当に少数の死神しか知らない。あの何故か霊王や霊王宮での色々を知っている藍染惣右介ですら始解の確証なしの予測しか出来なかった程だ。

死神でさえない僕にそれを当てられると凄く驚くだろう。

「次は六車さん」

「始解は『断地風』、太刀筋を炸裂させる。卍解は『鐵拳断風』、始解の炸裂の力を集中させることで無限の炸裂を生み出す」

「当たってやがる」

「次は鳳橋さん」

「始解は『金沙羅』、斬魄刀を鞭状に変化させ追尾型の攻撃や爆発等を用いた広域の攻撃が可能。卍解は『金沙羅舞踏団』、まやかしの旋律で相手を魅了しそこでの幻を現実のものとする」

「うん、当たってるね」

「一先ずこんなところですね。どうでしょう、少しは信じて貰えましたか?」

「そこまで言い当てられて信じへんかったら嘘やろ。まだ本題あるんやろ? 続き話してみ」

「よし、これだけ合ってるなら多分霊王の情報も合ってるか!」

「了解です。その前に少々長くなりますがその未来の知識から得た本題」というより頼み事ですけど、その前提から」

「僕の目的は見えざる帝国の打倒ですがその王ユーハバツハも藍染惣右介も霊王宮への侵攻を目的としています」

霊王宮とは尸魂界の中心の瀨霊廷の直上にある場所を指す。尸魂界の王とされる霊王がいてそれを守護する王属特務の零番隊がそこで活動している。

「藍染は、霊王宮目指しとったんか!」

「はい、皆さん仮面の軍勢が虚化させられた魂魄消失事件はそのための一因でした」

藍染は昔、死神の虚化の研究を行っていた。死神を虚化させると魂魄が耐えられずに死ぬ、これを魂魄自殺と言うが研究の過程で多くの尸魂界の人々が死んだ。

平子真子達、仮面の軍勢も虚化をした上で死んでいないのは浦原喜助のおかげだ。

「あれらの実験を繰り返して自分が死神を超越し、霊王に成り代わろうとしたんです」

「霊王なあ、藍染はそれになって何をするつもりなんや?」

流魂街ルコンがいや

ら死神やらあいつは尸魂界に生きてる人達を殺し続けた。それやのに尸魂界の王になるっちゅうんはおかしな話やないか?」

「尤もな質問ですね。その話をするには霊王について詳しく話さな

ければなりません」

「霊王というのは世界に区切りがなかった頃、虚が一方的に魂魄を喰らうだけだった時代に生まれてで今の三界を創った人です。死神の力に加え滅却師、あと本人独自の能力もあつたようで正しく最強の存在でした」

「尸魂界の王どころか世界の中核じゃねえか!？」

「その通りです。それで三界が出来た当初に霊王のその力と世界の維持への反抗の可能性を恐れた四大貴族の一つ綱彌代によって全身を解体され今では世界を維持するための装置となっています」

「なんやあって」

僕は世界の腐敗に興味は無いけど、彼らからすれば元々の職場がそういうことを土台に成り立っていると知れば驚きも一入だろう。

「藍染惣右介はそれに反発して自分が世界の中核に成り代わろうとしたしユーハバツハは三界を破壊しようとしています。ユーハバツハと藍染惣右介どちらかだけでも相当な脅威です」

「特にユーハバツハは尸魂界の影の空間に隠れていてその方法はまだ解明されていません。だから滅却師との戦場は必ず霊王宮直下の瀕霊艇となるでしょうから藍染惣右介を放置してユーハバツハと戦えばその後に藍染が仕掛ける形になるでしょう」

「待てよ、てことは滅却師の見えざる帝国つてのは瀕霊艇の真下に潜んでやがるのか?」

「そうですね。しかも世界の様々な影から外を視ることも出来ます。尸魂界の情報は筒抜けです。現世はあまり注視していないようなので現世の滅却師に関わりさえしなければこちらを視てくることは無いでしょうが」

「それは不味いね。死神達は気付いていないんだろう?」

「そうですね。未来での一度目の邂逅では手酷くやられたそうですよ。でもユーハバツハの方の侵攻は普通にしてればあと12年は掛かります。彼等はユーハバツハの力の復活を待っているのです」

「藍染の方は根城は割れててまだ戦力は整っていません。狙うならまずそっち。でもその藍染勢力ですら恐ろしい程に強力です」

「根城は一体どこにあるんや?」

「虚圏にある巨大な城、『虚夜宮』^{ラスノーチエス}です。でも平子さんの単身突撃の卍解は通じない可能性が高いと思います。藍染の始解、鏡花水月は五感の支配による相手の視界の改竄です。ある条件を満たせば前動作無しで相手を嵌められます。そして、平子さんや仮面の軍勢の皆さんはその条件を満たしている」

「発動位置そのものをズラされて発動範囲から外れられるっちゅうことか」

「で、何なんや条件って?」

「藍染が入隊した時に始解のお披露目会やってませんでしたか? あれです」

「本性を現す前でも、あいつあんな派手なこと進んでする奴ちやうかったけどそういう訳やっつたんか」

「ここまで前提です。それで頼みたいことっていうのは僕も藍染との戦いに参戦したいっていうのを見えざる帝国との戦いに手を貸して欲しいということですよ。どうでしょう手を貸してくれますか?」

虚化の習得、それはとても重要なことではあるけれどここに来た最も大きな理由は実はこれだ。僕は弱い、あまりにも浦原の協力が得られたとしても隊長レベルの敵が26人もいる。しかし天敵の虚の力を持った隊長格レベルの人達が8人も集まれば、勝機はある!

「藍染との戦いに混ぜるのは構へんけど、そうやなあ、滅却師ん話は死神とのいざこざやから首突つ込むのは嫌やけど瞳のこともあるし、三界崩されるいうことやったら他人事や無くなるわ」

「世界が無くなっちまったらジャンプもなくなる。それだけでも理由としちゃ十分すぎるぜ」

「そうだね。僕もまだこの世界に満ちるアートを探しきれていないのにそんなことされちゃたまらないよ」

他の皆もどうやら同意してくれているようだ。

「ま、そういう訳や手伝ったるわ」

「ありがとうございます!」

よっしゃあ!!!

「藍染との戦いに関しては僕には鏡花水月効かないので少しは役に立てるかと思えます!」

親父によるとそうらしい。そもそも僕は対ユーハバツハ用に改造された魂魄らしいが藍染との戦いも想定していたのだろうか？

「え、お前鏡花水月効かへんの？ 何でや?」

「理屈は分かりませんが親父からそう聞きました! 精神干渉系全般に耐性があるらしいんでお昼食が終わったら下で平子さんの逆撫使って検証してみませんか!? 僕試したこと無かったですよね!!」

「お、おう。ええで」

「何だか彼いつにも増してテンションが高いね」

「隠し事を吐き出せたからスッキリしたんだろ。あいつまだ若えし重かったんだろ」

いやーなんか凄いいい気分だ。あとはひたすら訓練するのみ!

頑張るぞー!

虚化

僕が仮面の軍勢で修行を始めてからもう6年が経つ。家で過ごしていた頃よりも時間が過ぎるのが早いように感じる、何故だろう。

今の環境は沢山の戦いのプロがいて、それに師事出来るという最高の状態となっているだけあって汎用霊子利用装置の補助無しに空に立ったりと家での修行が馬鹿らしくなる程には成長出来た。まあ皆にはまだ全然届かないけど。

今日も今日とて練習だ。基礎は固めたから次は戦い方を実践形式で学ぶところになる。

当番は矢胴丸リサさん。この人は隊長じゃなくてその補佐にあたる副隊長だった人。眼鏡を掛けていてでいつもエロ本を読んでいる。本人曰く興味があるだけらしいが、あそこまで行けばもう趣味の範疇になってると思う。

「卍解」

今では発動直後の眩暈も無くなり、単純に体の強度的に使えないものはあれど全能力を自在に操れるようになった。

皆に聞いたところこの卍解の強みは圧倒的な手数だそう。例えば火炎球を放ったとき光系の斬魄刀による視界ズラしを使い視覚と霊覚で捉える景色のズレで相手を一瞬混乱させその内に当てたりと本来単一能力の斬魄刀に比べ鬼道衆の用な多彩な戦い出来るのだとか。

といっても一つ一つの出力は、斬魄刀の攻撃は霊圧に依存するため昔より上がりはしたが未だ弱く練度も低いので卍解発動時に放った光系の斬魄刀による視界ズラしを乗せの雷撃は始解さえしていない矢胴丸さんの剣撃に全て一太刀で叩き伏せられてしまった。

「ッー」

瞬間、姿が掻き消えた。

あれは、瞬歩！

僕も使えるは使えるけど唯でさえ霊力利用の多い戦い方をしてい

るからあれまで使えば一瞬でガス欠になる。

かといって体は追い付けない。ならやるべきことは一つだ。

最初の攻撃の際に僕の周りの景色もズラしていたが、更にそこに風系全てを使った風の層を造り上げた。

これなら斬撃は通つても届かないから時間的余裕ができる。対応も――

「破道の三十一『赤火砲』。ちよつとはこつちも警戒しいや」

「！」

鬼道か。しかも爆発タイプだから風の層で受けても体勢を崩される。その無防備なタイミングに攻撃を喰らえば負ける。もう飛んできているし！ 能力の発動が間に合わぬいや。

背中 of 霊子利用装置は僕自身の霊子利用能力が上がったお陰で霊子を溜めることに集中出来るようになった。だからガス欠を遅らせるために使っていたが今溜まつてるのをぶつければ。

相手の赤い攻撃には見劣りする青白い光弾が背中から発射され何とか着弾前に直撃し、軽減された爆風は風の層に阻まれる。

よつし。成功。次は距離を取られないようにしないとあんな早さで射撃されたら持たない。僕の面攻撃じゃ足を止めることは出来ない。なら総数を落として火力を引き上げながらギリギリ避けられないよう囲む。瞬歩は高速移動であつてテレポトじやない。正解し続けているだけあつて消耗はそれなりに激しい。短期決戦で決める！

火柱、光を収束させた不可視の熱線で六方を囲む。風の層の配分を前方八割後方二割に切り替え前方は巨大な槍のように渦巻かせ、後方は受け皿のように変形させる。

そして、背中側を爆発と前へ引力を発生させ急加速。手に持つ二本の剣の硬度、切れ味、身体の強度を引き上げ突撃する。

六方の攻撃を破壊するならその隙に一撃喰らわせられる。前後には動けるだろうけどのみち僕と衝突する。今のランスタイプなら刃渡りの剣撃も層の厚さに鬼道だつて一発ぐらいは防げるぞ。

「じゃあ、これはどうや？」

しかし、あの人は不敵に笑って――

「潰せ――」

斬魄刀と鞘を合わせ回転させるその風圧だけで六方の攻撃をねじ曲げた。

「――鉄漿蜻蛉はぐろとんぼ」

回転が止まった時、手にあったのは巨大な槍。もう避けれる状態なのに彼女は動かない。

真つ正面から受けるつもりか。槍の攻撃範囲なら風の槍ごと僕を叩けるとの考えだろうか。まあどのみち近寄らなければならぬし好都合だ。それに槍は一撃は強力だが懐に入れば二撃目は飛んでこない。一撃さえ避ければ――
来た！

思考の中、神速の一撃が降り落とされる。視覚を、反射神経を自壊寸前まで強化し引き戻せないところまで来たところで

「ぐッ！」

風を自分に横殴りに叩き込む。体は剣撃直下から押し退けられ、さらに逆向きの一撃を喰らい元々あった前進の力を合わせ真横から強襲する。――！

これなら――

そう思った瞬間、

「ガッ!？」

鋭い一撃が胸を打ち後方へ吹き飛ばす。

突然の痛みに混乱しつつ相手をよく見ると、

鞘!?

始解を解除し鞘をこちらへ差し向ける矢胴丸さんの姿が見えた。

「甘いわ」

瞬歩で既に真上に移動していた矢胴丸さんが追撃を放つ。何とか剣を打ち合わせるものの体勢を崩した状態だったのでそのまま叩き落とされ地面に激突する。

「ぐあっ！

痛たッ」

何とかが起き上がろうとするが、首元には刀が添えられている。

「あたしの勝ちやな」

「はい。今回の戦いどうでした？」

「まだなあってへんところはああるけど、とりあえず詰めが甘いわ。自分の能力に意識割きすぎて相手の行動が見えてへんし予測の幅も狭い」
「このままやったら戦い方自体変えてバランス取った方がええんやけど今までの成長速度から考えるんやったら今のままで相手をよく見ることを念頭に置くぐらいええからそこ気いつけや」

「はいー」

「あと、そんぐらいまで霊力上がったんやったら虚化の習得ももう始めれるわ。あとちよつとでバイトから他の奴らも帰ってくる頃やし

一旦休憩や」

「え？ あ、はい」

虚化　ようやくか

そして、大体一時間が過ぎた頃、いつもの建物地下で一同が会していた。

「ほんなら、始めるで」

そう言つて平子さんが眼前に掌をつきだすと意識が遠退く。

「わあ」

そして完全に暗転した。

.....
ここは。

意識が浮上するとそこは僕の家だった。

「ここが僕の心象風景か？ 端っここが仮面の軍勢の建物になってる。さすがにこんな長〜くいたら影響も受けるか。」

彼らとの生活を思い返し物思いに浸っていると

ドスン、と異音がした。

音源である後ろを見ると真白な異形がそこに佇んでいた。

その異形は人の形を為してはおらず全長5mオーバー僕の140cmが石ころに見える。更に全身の筋肉がバキバキという擬音が聞こえてきそうな程膨れ上がっていたボディビルダー真つ青なぐらいだ。

「お前が内なる虚って奴？ よろしくな。いやー僕さ君に力、貸して欲しくてさ。どうかな戦うの危ないしき。君も痛い嫌でしょ？

平和が一番！ ラブアンドピース！ だから戦わずに話し合いで貸すかどうか決めよう。他の皆は内なる虚はガン無視で襲って来るところのトゲトゲも格好良〜い！」

無理無理無理い!!! 何この化け物デカすぎだろ!! 皆こんなのと戦ってたの?? 凄すぎでしょ超尊敬してますクソツツ!!!

僕の話に乗ってくれ!!! 話し合い最高! 話し合い最高! な!!!!??????

だから――

「んぐぶあ?」

顔面に超速度の拳が突き刺さり吹き飛ばす。家の壁、地面、至るところをバウンドし最後には奴の眼前に戻ってきた。

見掛け倒しじゃなくてしっかり強い。こんな奴どうやったら倒せるの!?

ペタン

僕と内なる化け物虚。そのどちらでもない第三者の足音が静かな空間に大きく響く。

次は何だよ

「ばばばばば、あばば」

は?

赤ちゃんがいた。しかも一人二人じゃない辺り

一帯にだ。そして一斉に化け物虚に飛び掛かった。

意味分かんない。どうなってるんの僕の心象風景。

.....

呆けている内にも目の前の戦線は激化していく。
そして、しばらく放心していると、

「たあい!!」

赤ちゃんの一人が虚の顔を踏んづけて空に拳を掲げて叫ぶ。呼応するように周りの子らも拳を掲げて叫び始めた。

そんな光景を見て僕は、

もう・どうでもいいや。

考えるのを諦めた。

あ、意識がまた・

更に暗転した意識が、いやこれまで心象風景にいたんだから更にはなく最初の浮上か。

周りには結界、中には平子さんがいる。虚化した僕と戦っていたのだろう。

「あの平子さん」?

あれ何か声が・

虚みたいだ、と思つて全身を見ると肌が白い。よく見てみると視界も狭い。

「瞳、意識戻ったんか? やけど・その体」

平子さんの声には困惑の色がある。それはそうだと思つた。だって彼らの体験談にはこんな話はなかった。全身の虚化が解け仮面だけが残る。そういう話だったのだ。

取り敢えず警戒を解くためにいつもの調子で話し掛けてみる。

「もしかして僕の体、虚の体に見えてます? 僕の目の錯覚とかじゃなくて?」

「そうや、一体どうなつとるんや?」

「さっぱり分かりません。何でしょうねこれ? でも何か凄い体が軽いです!」

まるで羽毛になったようだ。全能感が全身に満ち満ちている。今

なら何でも出来そうだな。

「あの〜平子さん。ちよつと戦いませんか？ 今の力を確かめてみたいです」

「ま、ええわ。動かんことには分からへん。ええで受けて立つたる。ハッチ！ 結界はそのままや、まだ突然虚に制御奪われるかも分からん。もうちよい様子みるわ」

「はいデス」

「よーし。行つくぞー！」

思いつきり踏み込む――が。

「のわっ!？」

景色が跳んだ!？」

ドカン、と壁の端に衝突する。

「響転か!？」

響転つて確か虚が使う小距離転移技だっけ、完全に霊圧が消えるのが特徴・だったよね。何で踏み込みだけで　もっかい試すか。

「よいつしよ・あっ!??」

また壁に激突した。

体が頑丈になつてるからか全然痛くないけど怖い。力が制御出来ていないのか

「大丈夫なんか瞳!？」

「ええ、まあ・痛みも傷もありませんし」

「動くのは控えとき・危なすぎるわ」

「はい・あ、じゃあ虚閃撃つてみて良いですか？ 虚閃！ 撃てるか分かりませんが」

虚閃とは虚の得意技のビームだ。

「まあ、それはええわ結界の誰もおらんところにやっとき」

「はい」

ええつと確か体の中のエネルギーを放出するイメージで拳から　!？」

極光が放たれた。有昭田さんの結界に穴を空けまだ、止まらない

壁に打ち付けられた虚閃の衝撃によって地震かのように地面が揺れる。

「何や、この威力は。」

!?

本当に何だこれ。体から力が。いや、抜けるんじゃない、もう抜けている。今の虚閃で使い尽くしたって言うのか？ 僕の力を。

「それは融通が効かなすぎる」

遠退く意識の中に小さく皆の声が聞こえた。

「あれ、ここは」

目を覚ますと僕のベッドの上だった。

「よう、起きたか」

横にいたのは愛川羅武さん。前も言ったように元隊長でジャンプという漫画雑誌をこよなく愛している人だ。昔のやつを見せてもらってから僕もハマったが最新刊をこの人が独占しているので困っている。

「あ、愛川さん。僕どのぐらい寝てたんですか？」

「3日だな」

「え!?! 3日も?」

「ああ、ピクリともせずぐっすりだったぜ。ハッチの検診によりや急激な霊圧の喪失が原因だよ」

「ああ、あの虚閃。」

「そうだ。まあ、あれだけの虚閃を撃ちやあ当然だわな」

でもあの力を使いこなせるようになれば強い武器になる。新たな可能性が見えてきたぞ。

「あの力。どうやって制御すればいいんでしょうね？」

「俺達の時とは色々違いから模索していくしかねえだろうな」

「ですよー。あれ？ 僕のバイトのシフトってどうなってるんですか？」

僕はもう17歳、身長は全然伸びないがもう働ける年だ。浦原さんに融通を効かせてもらってバイトが出来るようになった。仮面の軍勢の建物には電気も水道も通っていない。だから就寝は早いけどその時間からバイトをしている。3日の内にシフトを入れていたのだが一体どうなったのだろうか。

「ごつちから電話いれといたぜ。風邪拗らせて酷い熱があるってな。かなり直前だったんだ。急なシフト変更になったろうから次、行ったらしっかり謝っとけよ」

「はい」

うーん、申し訳無いことしたな。虚化の訓練をするんだったらいつこうなるのか分からないだしこれからは予定に余裕を持たせよう。

「あ、ちよつと電話入れてきます。今日は愛川さんが修行当番なんですよ？ 地下、先に行っておいて下さい。後で合流します」

「おう」

突然発生したイレギュラー。不安もあるけど同時に期待もしている。予定よりも皆の役に立てるかもしれない。

しかし、あの赤ちゃんは一切何だったのだろうか。あまりに不可思議な存在だった。心当たりは一切ない。

僕は一体何者なのだろう。

虚夜宮強襲篇

会議そして決行

虚化習得から二年が過ぎたが制御は一向に上手くならなかった。全身が虚みたいたいになつてるし移動は勝手に響転になるし虚閃を撃てば力を使い尽くす。

僕のムキムキ虚の話を皆にしてみたが皆のやつにはそんなのは出てこなかったと言っていたのでやっぱりこの虚化は何もかもおかしいと思う。

まあ、そんなことは置いておいて今すべきは藍染惣右介の話だろう。今から二年程後に奴が本格的に動き始めてしまう。そうすれば黒崎一護君が戦いに巻き込まれるし藍染の動きも分かりづらくなる。

だから、そろそろ虚夜宮への襲撃を始めなければならぬだろう。藍染一味への対策会議自体は未来の知識を伝えてから、度々行われていて藍染撃破の案は幾つか出された。例えば彼の腹心の市丸ギンという男は実は藍染を殺す気でいて即死させる術を持っているから、そのための道を作るという案。平子さんの卍解を何とかして当てて数を減らし鳳橋さんの卍解の即死攻撃で残りを倒すという案。色々出たけどやっぱりモーシヨン無しで鏡花水月に嵌められるという点が痛すぎる。藍染惣右介に認識を弄られれば味方同士で殺し合いかねないから多数で襲いかかるのが愚策になるというのにあいつが単身で強すぎて一対一も難しい。

倒し方以外なら大体決まつてるのになー、とそう思う。虚圏へはここに来たとき受領した霊力が一切ない親父用の強襲用機動砲台の黒腔開通機能で虚圏には渡れるし霊圧遮断マントで相手に気取られ無い。それに浦原さん特製の霊圧遮断装置探知レーダーも作って貰ったので移動にそれを使っている時の藍染の居場所が分かるしそれから藍染がいないタイミングで仕掛けて他を一網打尽に出来るのだ。

いつもの修行の後、今日の当番の平子さんによる講評を聞き終えてぼーっと考えていると、ピカツと頭に電流が走ったような感覚と共に

ある発想が頭に浮かぶ。

「あ」

「何や突然」

「いや、かなり前に僕の視覚を皆に共有出来れば藍染の鏡花水月に対応出来るかもしれないって話し合いをしたじゃないですか」

3年程前の会議の時、僕の特異性を生かす為の案の考えを出した事があった。それが視覚共有。昔はそんな方法があったらな程度の話だったが最近あることがあってそれが出来る目処が立っている。

「そうやな。ダメそーやったけど」

しかし、その案も結局ダメだった。視覚を共有すれば鏡花水月は破れるにしろ敵はそれだけではないのだ。僕だけの狭い視界では他の敵に対応出来ないのは明白だった。

「僕の親父が浦原さんに作って貰ってた大きい乗り物あるじゃないですか。あれって内部に搭載された擬似鬼道で透明化も出来るしひっそり近付いて藍染を黒腔内に飛ばして閉じ込めてその内に他のやつ倒して出てきた藍染に視界共有を使って一斉に掛ければ勝てるんじゃないかなと思って」

「黒腔は鬼道で開けるもんやろ？ 鬼道っちゅうと藍染も相当な腕や。虚圏を根城にしとる訳やしあいづも使えるんちゃうか？」

「あーそれだと出てきちゃいますね。あ」

「次は何や？」

「ぎっぎの続きですけど藍染が出るために作った黒腔にこっちの黒腔の座標合わせれば不安定化してゲート閉じるんじゃないかと思って」

「それなら行けそうやな」

「ゴリ押しだけどいい感じだ」

「ようやく、藍染打倒への光明が見えてきたようでこれには平子さんもニッコリ」

「ですよね」

「でかした、瞳！ 全員集まったらそこで作戦完成させるで！」

「了解です！」

「——そういやハッチ、新しい鬼道の進捗はどうや?」

あれから少し時間が経って夜、皆が一堂に会して作戦の擦り合わせが行われている。今はさつき話した目処、に繋がることであるハッチさんの新鬼道についての話だ。

元々ハッチさんは1個のミスで全滅しかねないこの作戦を円滑に、そして正確に進めるために全員の思考を軽く繋げて全体の情報を瞬時に交換し合える鬼道を作ろうとしていた。同じく感覚に作用するものとして視覚共有の鬼道をハッチさんが編み出したのだ。

「はい、精度は実用に問題ないのデスが、発動中身動きが取れマセン」
「使えるんならええわ、丁度脱出口守つとる奴が1人おらなあかんかったんや」

僕はロケットで虚圏へ渡るがあれは一人用なので皆の方は僕がこつちに來るときに乗ってきた車を使って侵入するし脱出もそれです。僕の斬魄刀を押し込めてたスペースはかなり大きいのだ。

「ハッチの護衛は状況によっちゃ出来ん奴もおるけど基本全員で回す。ええな?」

「ああ、それで最初の配置はどうするんだ真子。お前と瞳には役割があるが俺達は決まっていなかったら。さつきの話を含めるとハッチの護衛を1人は必要だが他は状況に対応出来るように虚夜宮に近付いておいた方が良さだろ」

「それもそうやな。藍染との戦いなんやから聞いても絶対全員前出たがるやろし、じゃんけんで決めたらどや?」

「何でやねん!?!」

まさかまさかの一発KO。敗者は猿柿さん。

「ドンマイです。」

あんな負け方あるんだなあ。でもここで不運を使ったなら次は良

いことあるでしょ。という思いを込めてガッツポーズ。

「憐れまんでええわ！」

「おめでとうございます？」

「祝え言うとするんちやうわ！ 何も喋らんでええ言うとするんじや！」

この人も矢胴丸さんと同じく元副隊長。超怒りっぽい人でいつつも平子さんともはや漫才と言うべき罵り合いを毎日繰り広げている反応が面白い人だ。

そんなこんなで会議が終わり、作戦の決行日と決まった一年後に備えて必要装備の調達、演習など決戦への準備が始まった。

そして一年後作戦は開始された。

白い砂、白い木状の何かが一面を支配する命を思わせない不毛の大地、虚圏の一角に巨大な建物がポツンと鎮座している。名は虚夜宮。かつては虚が支配していたが今はある死神が君臨し、その者に拠点として扱われている。

その遙か上空、音もなく出現した人影があった。

その人影こと、平子真子は眼下に広がる景色を見下ろしている。

ここが虚圏かあ・厳つ。真下にはバケモンみたいな霊圧ビシビシ感じるわ。情報通り最上級大虚が何体もおるな。

藍染のヤツ100年でここまで戦力集めて従えて、その上隊長としても振る舞つとするんやろ？ 鏡花水月あるにしても、どんなバイタリテイしとんねん。

やけどその計画もご破算や。喜助には命を救って貰って瞳には藍染の虚をつける知識を貰って、感謝してもし切れへんわ。

しっかし、未来の知識・なあ。

それ無しには今の状態はあり得なかったであろう知識について思考を巡らせていく。

今んとこ全部当たつとるけどその出所の瞳の父ちゃんが怪しすぎんねんなア。

この9年で分かったことやけど瞳は嘘が下手や。あからさまに目エ反らすし声も上擦る。そもそも嘘を吐こうとすること自体少ない上に突き通せへん。そんなアイツが吐き続けとる嘘がある。それはアイツの特殊な力の原因。

アイツの持つ力はかなり特殊や。虚化によつて得られる力が元々の力に対して大きすぎるし意識保つたまま全身が虚化しとるし、斬魄刀は何百本もある。それが自然に発生する訳がない。確実に魂魄をいじられとる。

アイツが昔、アイツの父ちゃんと二人でずつと暮らしとつたつちゆう話に嘘の色はなかった。それ以降は喜助か俺らとしか会つてへん。そういうことやつたらアイツの力の原因はそこにある。

一体何をしたのか、それに何の目的があつたのか。そもそもアイツの父ちゃんは本当に――

深化していく思考を衝撃が中断する。

虚夜宮の天蓋の上に足がついていたのだ。

今は余計な事考えとる場合やないな。

思考を切り替える目的も兼ねて空を見ると、そこには現世とは満ち欠けの反転した月があつた。

「ええ月やわ、ピツタリや」

あまりに似つかわしすぎる空模様には笑み深くし、ここにいないあの男に宣誓するように、

「お前の計画もこの状況ごと、纏めてひっくり返したるわ」

「卍解」

「逆様邪八方塞」

そのほんの少し前、藍染が離れた虚夜宮内部には風を用いて空を駆ける柄に謎の装置がついた斬魄刀が侵入していた。

虚夜宮には虚の進化種である破面アラシカルがいてそれらは藍染に数字をつけられている。頂点の十人は十刃エスパーダ、その副官の従属官フランゾン、元十刃の十刃プリバロン・エスパーダ落ち。侵入したそれは彼ら全てに攻撃を仕掛けた。

破壊を繰り返されるも都度侵入しやがて敵と認識される用になり。

そして現在、万物の認識が流転した。彼らにその斬魄刀は味方だと認識され、彼らは仲間同士で潰し合いを始めた。

破面達め・・・！
僕の斬魄刀はオモチヤじや無いんだぞ・・・！
煎餅みたい
にバリバリと・・・ まあ・いいや。斬魄刀のことを攻撃しないってことはさつきまで敵と認識されていたということだから、僕の霊圧も平子さんの霊圧もしっかり感知してこれも敵と認識したことだろうし破壊個数も許容範囲では・ある。

虚夜宮の周囲を回るように飛行する不可視の迷彩とコックピットを開けることで霊圧遮断状態を解除した巨大な機動砲台の中で斬魄刀を遠隔で操作しながら動きを見る。

僕達が狙ったのはただ藍染がいなくてのタイミングじゃない。十刃が会議室に集まっているこの状況をだ。破面は、特に虚夜宮にいる破面達は皆強力だ。そういう奴が死んでしまえば・何か魂魄の均衡が乱れて地獄がヤバいとか何とかあんまり覚えてないけど親父は言っていたので出来るだけ平子さんの卍解で死んでしまう破面を減らすため従属官が離れるそこを狙った。

十刃以外の同格同士の戦いなら疲弊したところに死なない程度に虚化して出力を上げた斬魄刀でチクチク刺せば何とか全員気絶で状況を終結させられると思う。

それに十刃だって。うわっ!?

ドガンッ! と虚夜宮の天蓋が打ち破られる音が二度響き渡る。

出てきたのは第1十刃コロネ・スターク、第2十刃バラガン・ルイゼンバーン、第4十刃ウルキオラ・シファア。そして第10十刃ヤミー・リヤルゴ。2は1を10は4を追っているようだ。

刀剣解放か。その勢いでさっさと消耗して欲しいね。藍染は確実に虚夜宮での異常を察知する術を持っているだろうし全快で来られたら勝ち目無し。

第4以上の十刃は虚夜宮の天蓋の下での刀剣解放、虚への回帰によるパワーアップを藍染によって禁じられているのだ。

僕の機動砲台の射撃武装は僕の使う汎用霊子利用装置と違い残弾式。それだけ聞くと弱く感じるかもだけど威力は何倍も上だ。霊子弾数は30発。10発分を収束してぶっぱなすことも出来るので疲弊して油断している十刃ならある程度ダメージを与えられるのでは無いのだろうか。

まあ何にせよ戦いの結果次第だ。上手く転んでくれよ。

天蓋には悪魔のような黒い翼を持つ白い人型と虫のような多脚の生えた巨漢。まるで死神のような姿を象った骸骨と狩人のような姿をした両手に銃を持つ人型が衝突した。

失敗

虚の仮面を剥ぎ進化して辿り着いた存在、破面。彼らの頂点十刃の番号は1から10と振られているが実は違う。本当は0から9。そしてその第0十刃は10番のヤミー・リヤルゴ。

破面になると虚は死神に近づき虚成分を押し込めた斬魄刀も出現するが刀剣解放という技を行使すれば刀と融合し虚の力を回帰させ更なる力を引き出す。

ヤミーはその時、10の1が消えて第0十刃となるのだ。能力は怒れば強くなる。

単純だけど恐ろしいなこれは。親父の情報以上だ。

映画とかで見る怪獣のようだった。最初は10m程だった身長も今では虚夜宮を抜き去る程になり力も増し続けていた。

相手も相手だけどね。

対するのは第4十刃ウルクイオラ・シファア。彼は理由は分からないが二段階の刀剣解放が出来る。一段階目では白かった全身も二段階目になると胴と顔を残して真っ黒になるので悪魔感が増している。

二人は虚閃やら雷霆の槍やらをぶつけて殴り合っていてそこから中クレーターまみれだ。一撃が打ち合わされる度に虚圏そのものが揺れている気さえした。

しかし、戦いの終わりは近そうだ。ヤミーの右腕は千切れ飛んでいるしウルキオラは五体満足ではあるが何度かの直撃の都度に四肢が腕が折れていた。実際、二人の攻撃規模も落ちている。

それに対して、少し離れた位置で行われているスタークとバラガンの戦いは余り変容は無い。まあ消耗はあるだろうけど。

バラガンは老いを司る。万物を老いさせ殺す力。恐ろしすぎる能力内容だが単純に出力的な限界がある。スタークには無限装弾虚閃ゼロ・メトラージュ エツタという物量的には相当な攻撃手段を持っておりさつきから双方が双方の攻撃を相殺して状況は停滞中だ。

天蓋下は第5十刃ノイトラ・ジルガと刀剣解放の使えない第3十刃ティア・ハリベルが戦っている。他は何か誰も死なずに気絶してる

ようだ。良かった。

下の状況が良い感じになったのも浦原さんのお陰などこあるなあ。機動砲台コックピットにセットされていた武器、虚専用スタンガン。浦原さんに聞いたとこ親父の武器らしい。親父は霊力ゼロだから虚と遭遇した時は霊子レーザーで感知、スタンガンで動きを止めて汎用霊子利用装置を利用したブラスターで止めをさすという戦い方をしていたらしい。

虚夜宮の道中の虚は軒並みこれで動きを止めれたので侵入もスムーズだったし超消耗した破面を気絶させるのを安定させられた。

考えている内に僕は天蓋の下に降りていた。消耗した二人を倒すためだ。

霊圧の真上に立ち移動直前に解除していた虚化を再開する。そして身体強化の斬魄刀を利用し出力を上げる。虚化をしなければ身体を最大強化しようとすればこっちの体が自壊するので併用は必須だ。

全力で踏み込み響転、付近に近づき急所を外して突き刺す。

「テメツ!？」

「なツ!？」

「ごめんね」

二人の驚いた声を聞きながらスタンガンを重ねて浴びせて虚化を解く。

倒れる二人から流れる血をじっと見下ろしていると突然悪寒に襲われる。

死んでないよな？　　霊圧も消えてないし消えそうにないし　　大

丈夫か。

親父が死んでから復讐を誓ったあの日の僕は外に出たことさえない何も知らない子供だったのだと実感してしまう。

あの頃は親父以外の様々な死が物語の外を出ていなかった。だから親父の死の要因全てを殺してやろうと誓うことが出来た。でも仮面の軍勢の皆やバイトで出会った人達、店の店員さんとか昔とは比べることの出来ないくらい沢山の人と出会った。そして今では他者の命に途方もない重みを感じている。

こんな調子で僕は滅却師に復讐を行えるのか。剣を躊躇いなく振り下ろせるのか？ そんなこととして良いのか？ そんな思考が頭をぐるぐると巡る。

いや、待て今は作戦中だ。しっかりしろ！ こんなことウダウダ考えてる場合じゃない！

頭をブンブンと横に振って冷静を取り戻す。

あれ？ 天蓋上の他の十刃の霊圧が落ちてる。

皆が虚化している霊圧を感じる。ヤミーもウルキオラもバラガンもスタークも霊圧がめっちゃ落ちてる。

多分ヤミーかウルキオラのどつちかが倒れたところで平子さんが卍解を解除して全員で虚化して仕掛けて何とかしたんだろう。僕が下に行ってたから邪魔にならないように鬼道による通信をしてこなかったのだろう。

急いで飛び上がり、天蓋の上で平子さんに話し掛ける。

「上の十刃倒せたんですね」

「そうや、ええ調子やけど油断せんと気イ引き締めときや。本番はこれからや」

「はいー」

機動砲台に乗り込み透明化し待機していると

「！」

霊圧遮断装置観測レーダーに感があった。同時に巨大な三つの霊圧が真下に現れる。

「来たか」

虚夜宮の広い砂を歩き進む三人、藍染惣右介、市丸ギン、東仙要が天蓋に空いた穴から肉眼で確認出来る。

真つ先に下に降りたのは平子さん。

「久し振りやなア、藍染。ちよつと遅かったんちゃうか？ お前んとこの虚もう全部倒してもうたわ」

三日月のように笑みを深めた平子さんは藍染に向けて真つ先に口火を切る。

「どうやらそのようだ。しかも、ただの一人も殺してはいない」

「ホンマや、十刃も破面葬討部隊エクスセキアスも危ないところやけど確かに生きとるわ。器用やわア」

話の外で呑気な喋りをしているのは市丸ギン。感情がまるで読めない。未来の知識には藍染を裏切る男と書いてあつたけど本当なのかな。そんな感じ全然しないけど。いや・気づかれちゃダメなのかそういうのって。

「まるで、最初から私の戦力を知っていたようだ」

そうこれはそれぐらいじやなきや出来ない芸当だ。流石に分かるか。こいつは今の段階でどこまで悟っているんだろう。でも未来の知識なんて分かる訳ないよね？

「そこんとこは企業秘密や。言えへんわア」

「ほんなら始めようや、俺らの雪辱を、お前の悪巧みを打ち砕く戦いつちゆうんを・なア!!」

ダンツ!! と勢い良く踏み込み藍染へ斬りかかる。東仙と市丸は動き出そうとするが

「キミ達の相手は」

「俺達だぜ！」

二人に向かって黄金の鞭と巨大な棍棒が振り掛かる。

それを回避した二人へ上空から風の斬撃と虚閃が降り注ぎ藍染から引き離されていく。

「これでサシやな」

声と共に眼前を掻き巻く動作を行い仮面を出現させる。

「虚の仮面か」

「そうや、この100年で大分と上手なつたんやで。更に、や」

「倒れろ」

「逆撫」

平子の持つ斬魄刀の形が変化する。刀身に等間隔の穴が空き、柄の後ろに巨大な輪が接続されているような姿だ。

「!」

藍染が驚いたような表情をした。匂いを発し嗅がせることで相手の感覚を逆さまにする逆撫の能力にかかったのだろう。

「どうや？ 逆さまの世界は。歓迎するで」

「これでお前はどこまでが本当でどこからが逆さまかずーつと考え続けんとあかん。俺がどこまで逆さまに出来るんかもしらんと、なア」
平子さんは瞬歩を用いて攻撃を仕掛ける、がその先に藍染はいない。着地するその少し後ろだ。

逆撫は確かに直撃しているが既に鏡花水月も発動しているのか。ただどこつちにも策がある。

有昭田さんの鬼道、目の連動は付け焼き刃で情報共有の方とは併用出来ない。しかし通信の方で僕の視界を言葉で伝えれば不完全までも鏡花水月に対応は出来る。僕しか鏡花水月を貫通できない都合上一人が限界だが。

平子さん・後ろです！

と送ると平子さんは思い切り後ろへと斬撃を繰り出す。

「ほう」

「お前の斬魄刀への対策は真っ先に考えとるわ」

そこからはしばらく両者一步も譲らない一進一退の攻防が続いたが。

「君の鏡花水月対策は他者の思考を必要としているようだ」

「私の移動への反応が一瞬遅れている」

「その一瞬が致命的やって言いたいんか？」

「ああ、もつとも既に——」

背後を取られている指示ももう間に合わない。

今だ！ 黒腔起動！

藍染の体を囲むように黒い空間への扉が出現する。

「致命的なんはお前の方やったな、藍染」

一転攻勢ってヤツだ！ 後は黒腔を閉じれば

閉口用のボタンを押す

閉じれない!? 何でだよ!?

信じられないという気持ちのままボタンを連打する、しかし現実裏腹に機動砲台は何の反応も返さず沈黙するのみ。

「何が起こって」

「何やつとるんや瞳！ 黒腔を閉じんと——」

平子さんの怒号が聞こえなくなる程に眼前の藍染の行動に驚愕させられる。!?

藍染は何かを唱えていたのだ。

「外接詠唱。」

そうとしか呼べない光景だった。

そもそも浦原さんが造り僕が操作している擬似鬼道というものは鬼道の詠唱部分を特殊な機構で代用して簡単に発動できるようにしたもの。

藍染が唱えているのはその代用された詠唱を基に改良された鬼道、しかも基になった鬼道と同じ詠唱を丸々使って造られたタイプ。だから足りてない詠唱を藍染が加えるだけで鬼道の才能が無い僕は操作権限を失い、奴が鬼道进行操作するなんて事態になっている。

ガシツと機動砲台のフレームを掴む音がする。

「あ——」

スーツと全身が冷え込む。そして確信させられる。

逃げ、れない。

「君か。仮面の軍勢に知恵を与えたのは」

藍染は悠然と、そして確信めいた表情で僕に語り掛けてくる。

「瞳を離せ藍染！」

平子さんは虚空に向かって攻撃を仕掛けている。鏡花水月の術中だ。

「鏡花水月か。瞳！ どこにおるんや！」

「ひ、平子さん！ 僕は——」

言葉と情報共有の回線に居場所を伝えるが

「君が一体何者なのか、聞かせてもらおうとしよう」

既に遅く機動砲台ごと黒腔内に引き吊り込まれた。

決着

「瞳の霊圧が……ッ!？」

「余所見をしている余裕が有るのか？」

「そう、みたいだね」

平子と藍染が衝突した場所から少し離れたこの地点では鳳橋楼十郎、矢胴丸リサが東仙要と対峙していた。引き剥がしてから本格的に戦闘が始まっておよそ1分。二人は仮面を着用して戦っているものの相手は100年以上藍染の副官を務めているだけあって強者、手擦らされる。そして漸く追い詰め始めたところに海渡町瞳が藍染に連れ去られるという事態が発生した。

そして状況は更に変容する。

「ローズ！ 後ろや！」

リサからの声に応じ飛び退くと体があつた場所に紫色の斬撃が通過する。

「これは!？」

「死神風情が……下らん小細工を重ねておつて……!」

怒りに満ちた声を響かせるのはバラガン。

先の戦いでは仮面の軍勢ほぼ全員分の遠距離攻撃、虚用スタンガンの直撃を受けているため全身が傷だらけの体を引き摺ってはいるものの確かに立っている。

「な、まだ動けるのか!？」

「スターク、もう動けるだろう。立て」

「はいよ」

東仙の呼び掛けに応じて立ち上がる第1十刃。彼も相当な攻撃を受けた筈だがバラガンとの戦いでは無限装弾虚閃しか使っていなかったため消耗が少なかったのだろう。

そうして数分前まで仮面の軍勢優勢だった戦況は一瞬で逆転した。

バラガンの老い、スタークの虚閃、東仙の飛ぶ刀身。そのどれもが強力で単純に数でもこちらが負けている。だからこそ順当に致命的な隙が出来る。

「終わりだ、死神」

そこにバラガンの一撃が振り下ろされた。

が

「逆や」

当たらない、攻撃は景色をすり抜けた。いつの間にか平子の逆撫に嵌められていたのだ。

そしてバラガンの視界の少し上に仮面を着けた平子が虚閃を溜めている姿で出現した。

だがその虚閃は下からの青い虚閃に撃ち落とされる。

「させねえよ」

「よう見とるやんけ、破面」

憎々しげに平子が声を掛ける青い虚閃の射手はスターク。特にダメージが尾を引いているバラガンの老いによる防御の出力は落ちていく。だからこそ最大の慢心のタイミング、止めの一撃の瞬間に生まれる隙を霊圧遮断外套を着て狙ったが読まれていたようだ。

「ふん」

王を自称するバラガンにとって不意を突かれたところを助けられたことは少なくない屈辱を感じさせたが今は死に体、何とか飲み下した。

3対3、数だけは拮抗しているこの状況を見て平子は喋り始める。

「リサ、破面二人をローズと東仙から引き剥がすぞ」

「ま、この状況やったらそうなるやろな」

「やれるやろ、ローズ」

「勿論さ」

言葉通り逆撫を巧みに駆使して十刃を引き剥がしやって来た1対

1。時間的に限界の来た仮面を外したローズに東仙は喋り掛ける。

「わざわざ距離を離させたか」

「ああ、ちよつと事情があつてね」

「無差別型の卍解だからか？」

「さて、どうだろうね。何にせよ君はボクに倒されるんだから気にする必要は無いよ」

「卍解以外の手は既に読み切れた。仮面の無い今、お前は卍解を放つ隙すら得ることは出来ない」

「その慢心を粉々に打ち砕こう」

「鈴虫式式・紅飛蝗」

声と同時に刀を振るうと無数の刀身出現し、ローズ目掛けて殺到する。

その状況を飛んでくる刀身群のど真ん中に金沙羅を走らせ爆発を発生させることで打開するもその瞬間には瞬歩で背後を取っていた東仙の斬撃が襲う。

何とか直撃は避けたが背中を浅く掠めて血が吹き出していた。

「ぐっ」

天秤は完全に東仙側に傾いていた。1合、1合と重ねるごとにローズの傷は増えて、しかし東仙は無傷。

元々の計画ではまだ仮面を維持出来ている予定だったが予想外の虚のしぶとさに時間を使い切らされてしまった。

だがローズも致命的な一手は避け続けている。

市丸ギンには六車拳西、愛川羅武がついており単純に2対1。残りの十刃もかなり消耗している。戦場全体の天秤はまだどちらにも傾き得た。

ローズは防御に手一杯で攻撃自体を潰す余力は無い。

だから、東仙は決定的な一手を放つ決断をした。

「卍解」

始解状態の斬魄刀に出現した小さなリングが巨大化し九つし増加する。

「鈴虫終式・閻魔蟋蟀」

それぞれのリングから黒が噴出し巨大なドームを形成し二人を包む。

これこそが東仙要の卍解。黒い空間内の生物の聴覚、視覚を使用不

能にする能力を持つ。

普通、この卍解を能力の知らない相手に直撃させれば混乱や恐怖を呼び動けなくなるのは必定。

発動体勢から攻撃体勢へ移行し踏み込もうとするが視界の先にいる男は

「卍解」

「金沙羅舞踏団」

確かに言葉を紡いでいた。

「何!?!」

ローズの始解、金沙羅の鞭部分から織り造り上げられ

た幾つもの人型、空に浮かぶ左に指揮棒を持った巨大な両手が出現する。発動者のローズの手にも巨大な手と同じように右手に指揮棒が握られている。

だがそれだけだった。無差別型だと警戒していた東仙は発動と同時に攻撃を受けることを覚悟していただけに梯子を外される様な感覚がする。

今のところローズの卍解が行ったのは頭数を増やすだけ、それではこの卍解には対応出来ない。

だが、ならば何故距離を離れた？

その疑問が与えた危機感に応じて最高速でローズの心臓に剣を突き立てんと接近するがそれよりも早く目的の男は指揮棒を振るった。同時に旋律が奏でられる。

「ッ!?!」

そして有り得ないことが起こる。

視界に竜巻が映ったのだ。

東仙は盲目で生まれてから常に暗闇だけを見つめていた。その視界に突然、無数の竜巻が侵入した。

未知の情報に脳が混乱状態に陥り動きが止まる。無数の竜巻は巨大な一に収束し直撃して東仙の体を打ち上げる。

「ぐおっ!?!」

更に景色が次は無数の雷霆が彼の世界を侵食する。上空からの雷

霆の直撃を食らい地面に叩きつけられる。

そして、二撃で相当なダメージを負った東仙は残る力を振り絞り何とか顔を上げるが既に視界一面を埋め尽くす氷が回避不可能な程にまで接近していた。

視覚と聴覚が戻ってきたのを確認したローズは最後の一撃により氷漬けになっている東仙に言葉を放つ。

「音楽というのはね、繰り返される研鑽によって産み出される芸術さ」「だから極めれば音が消えても景色が消えても肉体に刻まれた記憶だけで成立させられる」

「第一の演目『竜巻』、第二の演目『天空の罰則』、第三の演目『氷王の裁定』これが君に送った曲の名前さ」

「もう、聞こえてないだろうけどね」

そう告げて平子達へと加勢しに飛び去った。

一方、黒腔内部では。

「てやああー！」

機動砲台から虚化、斬魄刀を強化し響転を用いて斬りかかるが藍染は難なく受け止める。

「完全虚化か。そして、内なる虚が不相応な程に強力だ」

「あつそ」

藍染の語りを聞き流し光を操り自身の見える位置をズラし、身体強化を最大にして攻撃を与えようとするが回避される。

「虚と自身にそれ程の力量差があるのなら魂魄自殺が起こって然るべきだが、それどころか虚を御している」

虚化は消耗が激しくて長持ちしない。本来なら肉体が弾け飛ぶ程の身体強化を重ねていてもギリギリだ。だがこの状態の出力は仮面を着けた平子さんを贅力だけなら圧倒出来る程だった。しかも今日は調子が良い前より力が出てる感じがしている。虚化しなければ卍解で皆の始解にボコボコに負ける位なのでほんとに頭おかしい強化倍率だ。だから当たりさえすれば何とかかなるかと思っただけで全然当たらない。

「ちよこまかと。当たりさえ、すれば！」

剣を振りながら負け惜しみを吐き出す。

「当たりさえすれば？ そうか、君にはそう見えるのか」

軽く笑いながら藍染は話す。

「え、違うの？ 僕の力が怖いからからそんなにチヨロチヨロと逃げ回ってるんだと思ってたよ」

その顔にムカついて煽ってやろうと藍染の会話に乗ってしまう。

「鏡花水月が効いていないな。平子真子が私に対応出来たのも君の影響か」

流石にバレるか。でもそれぐらいなら構わないさ。

「そーそー、鏡花水月は意味ないしそっちはパワーで戦うしかないでも僕には色々騙しの手がある。有利はこっちだよ」

「騙しの手、それは滞空しているその鬼道を発動させる装置によってか？」

その一言に困惑する。僕の周辺を滞空しているのは斬魄刀だけ、機動砲台はもう透明化で隠してある。

「え？ もしかしてそれ、この斬魄刀のこと？」

「それは斬魄刀では無い。その刀剣の内部構造は先程見た兵器に搭載されていた鬼道を発生させる装置と同じ系統だ。まさか気が付いて

いなかっただのか？」

「なに、それ。」

驚きと同時に腑に落ちる。

確かにこれは斬魄刀では無いだろうしその理屈なら納得がいくけど、でもそれなら親父は何故それを説明しなかったの？

何か全く別の技術が使われているものだと思っていた。というか親父の文献では鬼道代行装置には一切触れていなかった。親父が僕に嘘を吐いていた。

いや、そんなわけ無いだろ。だってその必要が無い。こいつが嘘を吐いてるんだ。藍染は嘘を高らかに語れる確か親父の文献にもそう書いてあったじゃないか。

「ハッ、そんな適当な口車に乗せられるとでも思った？」

「そうか、君は造られたモノか。成る程合点がいったよ。それ程の知識を持つにしては幼すぎると思っていたところだ。君は自らを改造しその姿に至ったのではない。改造され産み出された。君を造った存在は君に本当の事を知らせてはいなかったようだね」

「君の知識はそれからの入れ知恵のようだ。その分だと君から君の知識を聞き出したとしてもその中身は信用出来るものでは無さそうだな」
適当な事をベラベラと
でも

「長々とお喋りありがとう」

藍染の後方から青い弾丸が飛来する。

機動砲台だ。内部に僕の剣を残してそれを利用した遠隔操作を敢行していてタイミングを見計らっていた。完全に見えていない今ならば。

しかしそれでさえ当然のように防がれる。無詠唱で発動された断空は無情に無傷の様相を晒していた。

なんてね。ここからだ。

藍染との距離はさっきから切り合いをしてほぼゼロ。僕が弱いからって油断してるんでしょ。甘いんだよ！

右腕を突き出し虚閃を溜める。この虚閃は僕の残存霊力全てを

持っていくけどその分強力だ。でもこれじゃあの断空が抜けるか不安が残る。

だから更に！

僕は戦闘を行う際に常に斬魄刀を見せるように戦っている訳じゃない。あれの復元、または新造方法を知らないからだ。だからいつも光を操り、吸収し何もないように見せ掛ける。今日はその空間に持ってきた物がある。

汎用霊子利用装置。6年程前に一度家に戻った時に残り全てを持ってきている、数は数えきれない位。そして今ここにその全てが隠されている。藍染の喋りの間にチャージは完了された。

その霊子を虚閃に巻き込む

「！」

バギ、バギと発射しようとする肉体が裂け始める。

藍染も気づくがもう遅い！

「グッ！ アアアアア!!!」

鼓膜が破れそんな轟音が響き渡り一面を僕の虚閃が埋め尽くす。藍染は断空を発動したようだが砕け散る。

そして虚閃が勢いを失くし消えると先には何も無い。

「やったの」

血が吹き出し朦朧とし出す意識を奮い起たせ周囲を確認しようとする。

だが

「ガッ!?!」

何かが体を袈裟に斬った。

「なにが?」

僕の疑問と同時に目の前に男が現れる。

「藍染!?!」

藍染惣右介が傷一つ無い姿で立っていた。

そして、藍染の姿が消えていた理由は鏡花水月ではない。それは僕がずっと使っていた

「偏光 何で、お前が」

光を曲げて位置を誤認させる技。

「一目見て構造は理解出来ていた。それなら置き換えられた物を置き換える前に戻すことは易い」

「化け物があああ！」

「何とか剣を振るが藍染に指で止められ折られる。」

「やはりか」

「ぐっっ。そお」

「最早意識が朦朧とし過ぎてまともに思考が出来ない。」

「こちらが対策の出来ない一度目という機会を失った以上、仮面の軍勢も君も最早私の脅威では無くなった」

「君の力も把握した。残るは君の製作者だ。千載一遇のこの機会に出てこないということは戦闘能力を有してはいないのだろう。しかしその知識は脅威的だ」

「また会うことになるだろう。その時には自分を理解し製作者の思惑を踏み越え、私の前に立つことを期待するよ」

「破道の九十『黒棺』」

黒が一面を四角く囲みそして、

酷く醜い音と共に骨が、肉が押し潰れ砕ける音がして意識と思考が断絶した。

目を覚ますとそこはただ白い空間であの日見た赤子が僕を見下ろ
していた。

再生

「あ、君はあの時の」

虚化を手に入れたあの日に内なる虚を倒してくれた赤ちゃんの沢山いた内の一人が目の前に立っている。

「あの時は呆気にとられて言えなかったけどありがとね。君達がいってくれなかったら僕、内なる虚に潰されて殺されてたかもしれない」
言うと同時に疑問も抱く。どうしてこの赤ちゃん達は僕の世界に存在しているのか。

「たいー」

？

考えているとベチツと赤ちゃんに頭を踏まれる。

「うわっ!? 何々? もしかして怒ってるの。何で?」

赤ちゃんの動きは止まらない。更に踏んでくる。流石に痛いので躲して起き上がり距離を取る。

「え? え? 僕何かした? 何かしたなら謝るよ!」

「ばぶばぶば、たあくい!」

「ごめん、何て?」

感情の籠り方から何か言おうとしているのは分かるけど理解できない。
い。

「たあ」

あ、ため息吐いた。

「いや、ホントに理解できなくてごめんね」

何故か申し訳ない気持ちに包まれて気落ちしていると赤ちゃんは突如全力でこっちへ走り出した。

「へ?」

「たやあ!!」

「ゴツブア!?!?!」

鳩尾に飛び蹴りが突き刺さる。

勢いのまま倒れ込もうとするが地面と接触しない。全身を浮遊感が包み続けている。地面との衝突に備えて閉じていた目を開けてみると

赤ちゃんが上にいた。

しかも、見下ろされているところじゃない！ 赤ちゃんの姿が単行本位の大きさにまで縮んでる！ ってことは僕もしかして？

「落ちてるうううう!!!」

しばらく絶叫している意識が落ちた。

「はえ?」

再び意識が戻るとそこはさつきとは対称的に全面真っ黒な場所だった。

ここは黒腔。あ、そうか僕って藍染に殺されてでも生きてるってことは成功したんだ、再生の力。

親父からのこの斬魄刀についての説明は読んだが回道系の斬魄刀には小さく注釈がされていた。その注釈にはこの回道系ならお前だけなら完全に死んでも治せると書いてあったのだ。

しかし、回道にそこまでの回復力があると書かれていた文献を見たこと無かったし仮面の軍勢の皆に聞いても有り得ないと返されて僕も半信半疑な所があったが成功した。

やっぱり親父は僕を騙してなんか無いじゃないか。

機動砲台を呼び寄せて乗る。

どっちに向かえば良いんだっけ？ 確か作戦が失敗したら即撤退だったかな。今の時間はいつだろう？ 僕が死んでたのがどれぐらいか分からないけど、藍染が居ないってことは虚圏には戻ったんだろうしもう撤退してるか。

というか僕が復活できるっていう確証があったならもっと楽に戦えたかもな。機動砲台による黒腔展開さえなければ分断もされなかつたろうし鏡花水月の効かない僕が指示を出して戦えば皆のサポートも得られたし、死なないならゾンビアタックも出来るし。

。 。 。 。 。
負け惜しみだな、もう作戦は完全に失敗したのに。

僕のせいだ。藍染に黒腔の制御を乗っ取られた時に冷静を欠きすぎでいた。それにその後も失敗を取り返せずに無様に負けた。

平子さん達の復讐の絶好のチャンスをふいにしてしまった。

こんな様で良くもまあ協力させて欲しいなんて言えたものだ。その上僕の復讐を手伝って欲しいなんて。ただ足を引っ張っただけじゃないか。

こっちの存在は見えざる帝国には見られていたのだろうし藍染にはこちらの手札が割れている。これじゃ未来の知識を無駄にして仮面の軍勢を警戒させたただけだ。

これから、どうすれば良いんだろう。

まずは、皆の所に帰ろう。

目覚めてからじわじわと絶望的状况を思い出し地獄のような気分になりながら空座町へと向かう。

仮面の軍勢の拠点に到着し機動砲台から降りて中に入ると僕は真っ先に口を開いて、

「作戦、失敗させてごめんなさい」

頭を下げる。

せめて謝りたい。言っても状況は好転しないけど言わないと死にたくなりそうだ。

「頭上げや」

頭を上げる僕を迎えたのは怒りを一編も浮かべていない彼らだった。

むしろ何か呆れてる。 . . . ?

「何で謝つとんねん、作戦が失敗したんはお前のせいちゃうやろ」

「黒腔乗っ取るとか予想しろっちゅうほうが無茶や」

「それに俺らは俺らで瞳を拐う藍染を阻止出来んかったし藍染の勢力を倒し損ねた。変わらんわ」

「平子さん。でも皆にこの戦いの切っ掛けを与えたのは僕です。僕の復讐のために未来にある安全を放棄させたんです。なのに何も出来て無い。」

僕が居なければ、ここに来なければここまでの危険なんてやって来なかった。黒崎一護君が未来に全てを解決しただろう。

僕は自分の復讐のために皆の力を利用してしようと接触しそれを崩した。加えて今まで僕が皆にしてきたことは未来の知識を教えただけ。その知識は親父のもので僕のものじゃない。対して仮面の軍勢の皆は僕を強くしてくれてそれで見えざるの帝国との戦いで協力を了承してくれた。僕は皆に沢山の恩がある。なのに報いるどころか失敗の原因になるなんて。

「何や、そないなコトで悩んどったんか」

「確かに、切っ掛け与えたんはそりやお前やけどなア」

「お前が安全を捨てさせたんやない、俺らが捨てる決断を下してお前に協力することに決めたんや、気にせんでええ」

「でも、僕は」

それだけじゃない、今回の戦いを通して感じたことだが僕の復讐心は揺らいでいる。親父の死から時間が経ちすぎていたからなのか、現世にやってきて色々な人と出会ってしまったからなのか滅却師への殺意を殺すことに感じる恐怖が上回っている。僕は怒りを忘れてしまったのかもしれない。そんなこと今更言えない。それに――

「ふんっ！」

「あ」

「ヴェア????」

俯いていた僕の頭に激しい衝撃が走る。衝撃に撥ね飛ばされ身体

は勢い良く壁に激突する。

「ウジウジウジウジとお前は一体何を気にしとんねん！」

蹴ったのは猿柿さん。イライラオーラを全身から撒き散らして仁王立ちしていた。

「な、何やつとんねんひよ里!?!」

「こいつがあんまりにも煮えきらへんから蹴飛ばしてもうたわ。そんな何でや? 何がそんなに納得出来へんのかや、言うてみイ！」

「いや、納得とかそういうんじゃないわ」

「じゃなくて何やねん」

「」

「そういえば順番やったら今日はウチがお前を鍛える日、やったな。下降リイ、そのなよなよした根性叩き直したるわ」

そう言つてズカズカと足音を鳴らしながら降りていく猿柿さんを見送る。

そうだ本当に情けない。怖い、自分から復讐が消えていると感じるのが、返し切れない恩に目を向けるのが、僕が弱いのが。

こんな根性の僕に怒るのは当たり前だ

立って猿柿さんの後を追う。

「何や、行くんか」

「はい」

「そうか」

...

「来たんか、来おへんモンかと思つとつたわ」

「勿論来ますよ。折角鍛えてくれるんですから」

「ま、何でもええわ。行くで」

言葉の直後、猿柿さんは高速で接近し一太刀を振るう。

「くっ!」

鞘から抜き放った二振りでなんとか受け止めるが相手は勢いをつけて突撃していた。そして僕と猿柿さんの間にはほとんど身長差が無い。当然僕は押し飛ばされる。

続く追撃を何とか耐えるがこのままじゃ持たない。

「遅い! こんな攻撃、前までのお前やったら難なく受けきれてたやろ!」

遂に地面に叩きつけられる。

「もっかい訊くわ、納得じゃないって何や。納得は出来とるっちゅうことか?」

「凶星かいな」

「分かるんですか。何も喋って無いのに?」

凶星は凶星だけど何で分かったの僕何も行っていないよ?

「顔に出まくつとるやんけ。そうやったわ、お前は気づいとらへんのやったな」

「え?」

お前はって何? 皆は知ってるの????

「そんなコトはどうでもええわ! 納得出来とるんやったらホンマにお前は何に悩んどんねん!」

更に剣と剣が再びぶつかる。状況は変わらず劣勢。

「作戦の前から変わりすぎやろ! ウチからかうぐらい生意気やったお前が何をどうしたらこんな揺らぐんや!? 藍染か!? 藍染のせいなんか!」

身体を動かし続けて重ねた疲労が判断を、思考を鈍化させていく。そのせいで口を滑らせる。

「揺らいでるのは! 僕の復讐心です! 藍染のせいなんかじゃ、無いです!」

「復讐心!」

「あ!」

ヤツバ!?

自分の失言に気を取られて相手の攻撃の防御を怠ったが何とか直撃する前に猿柿さんが剣を止め「突然止まんや! 危ないやろ」と怒りながら距離を取る。僕の謝罪を聞き届けた後にため息を一つ吐いてからまた話を続ける。

「復讐心が揺らいどる。それがお前がウジウジしとった理由か」

「はい」

「流石にもう隠せないか。と察し諦めるつつ次の質問に備える。

「何で作戦の後なんや? 悩む間なんて何時でもあつたやろ」

「初めて敵と戦って気づいたんです。僕は殺すのが怖い、きつと親父の仇の滅却師さえ殺すことが出来ないって」

口に出すとより一層、復讐心の薄れを感じるようでとても嫌な気分だ。

「殺すのが嫌やから復讐心が揺らいどる? 何でや?」

心底疑問といった風体で首を傾げている。

「だって、僕の復讐心が死を厭う気持ちに負けたんですよ?!? 親父に

対する感謝が大きいんならそんなこと無い筈でしょ。」

その態度に不満を持ってつい語気を強めてしまう。

「いや、両立出来るやろ」

何でも無いことのように猿柿さんは語る。そんな堂々たる姿を見て僕は困惑する。

「え?? 何ですか?」

そんなわけ無い。それなら天秤に掛けるまでもなく殺せる決断が出来て然るべき筈だ。

「復讐て別に殺すことだけが復讐ちゃうやろ。それになお前の父ちゃんへの感謝つちゆう奴は薄れてないで」

僕が反論しようと言葉を紡ぐより先に更に言葉を続ける。

「さつき、顔に出やすいって話したやろ。お前はこっちに來てから今までお前の父ちゃんの話で沢山してきた、そんな時の顔見てたから断言出来るわ」

僕の知らない僕の話で復唱されて皆からは僕はどう見られている

んだらうと疑問に思う。そういえばそういうことはあまり気にしたことが無かった。この話を聞く限りもしかしたら僕は想像とは全然見られ方をされているんじゃないか？

「そう、ですか」

でも、それなら良かった。猿柿さんは悪質な嘘は吐かない人だ。それは断言出来ること。僕は親父のこと、ちゃんと心に刻めていた。

霧が晴れたような気分だ。

にしても僕の疑問に僕が答える形になったな。また機会があったら皆に僕の印象を聞いてみよう先の未来の暗雲も晴らしてくれるかもしれないし。

「マシな顔になったわ。じゃ、次の作戦会議しに戻るで」

「次つで・あ、尸魂界侵入」

「何や・まさか忘れとったんか!?! 重症すぎやろ!」

「あはは・ごめんなさい」

ここまでの失敗は想定していなかったとはいえ失敗用のスペアプランは一応作ってあったのだ。こっちの戦力は少ないならば皆纏めて4つ巴にしちやおうの案だ。

晴れた霧に次の目標はハツキリクツキリ後は会議と実践あるのみ。

「よーっし! 会議行きましよう!」

「いや、突然元気になりすぎやろ!?!」

待ってる滅却師! 僕の復讐を見せてやる!

尸魂界争乱篇 影より出る者達

尸魂界、現世で死んだ人の魂が行き着く場所。一つの世界として成っており家、食べ物、睡眠など現世と変わらない所はあるが文明レベルは大きく異なり死者が流れ着く流魂街は特に低い。流魂街は沢山の区に分れているが振られている番号が大きいほどは治安が悪くなっている。

そんな流魂街が周りを囲んでいるのが瀨霊廷。尸魂界の機能の中心核を担う場所だ。中央四十六室や護廷十三隊などの複数の組織が存在し虚退治等の様々な活動が行われている。

今僕が居るのはその上空。霊圧遮断外套を羽織り昔親父が使っていたらしく家に置いてあった透明化の鬼道代行装置を使って僕の斬魄刀で操縦している同じく透明化させた機動砲台の上に立っている。今回行われる作戦は超大雑把に言うとも見えざる帝国の情報を瀨霊廷全域に聞こえるように叫びまくって滅却師を誘き出して死神と戦ってる所の隙を突いて倒し、藍染達も尻尾出したら倒す出さなきや後回しという作戦だ。

先ずは浦原さん特製眠り薬で一般護廷十三隊隊士を眠らせ、滅却師と戦えば死んでしまう人達を遠ざける為の作業だ。

色んな位置から粉薬をブン投げまくって暫く、下は騒ぎになっていた。

良い感じ。次はこの作戦において最も重要と言える工程だ。有昭田さんが『天挺空羅』で滅却師の情報をばら蒔く。これをすれば勿論隊長方は怪しむだろうが、彼らなら出てきた滅却師との戦いの中で理解して上手く使ってくれるだろう。

あ、有昭田さんのリアルタイム通信鬼道が切れた。『天挺空羅』を発動させるのか。じゃ、僕も準備しないと。

縛道の七十七『天挺空羅』は霊圧の位置を把握した相手に情報を送

り付ける縛道。縛道の五十八『掴趾追雀』かくしついでやぐという周りの生き物の霊圧を把握する技を使ってから発動するのが一般的だ。有昭田さんもその例に漏れないが効果と範囲が圧倒的で無詠唱の『掴趾追雀』で瀧靈廷の外側までの霊圧を把握出来るように『天挺空羅』を完全詠唱した暁には滅却師の大半の情報を一発で送りきって見せる程だ。

瀧靈廷のそこら辺の建物に乗って、僕が薬をばら蒔いている間に皆が気付かれないようにそこらに置いたスピーカー達を使ってマイクで僕の声が発する準備をする。

バギン、と鉄が割れるような音が静かな空に響く。

!? 何、今の――

瞬間、大気を揺らす程の轟音を伴った蒼い火柱が無数に立ち上る。

「霊子の火柱。間違いはない！でも、早すぎる!!」

焦る僕を嘲笑うように、滅却師が影から出るのを祝うように火柱は爛々と雲が影を落とす大地を照らしていた。

・ユーハバツハの力はまだ戻っていないはず。何で今出てくるんだ
・もしかして僕達のことガバレて、でも分かるはずが無いけど
・藍染との一件でそこまで推察する奴が出てくる可能性も推察程度で軍を動かせるのか？そもそも僕達の位置だって分からない筈なのに対応が早すぎる。

見えざる帝国の奴らは影から地上へ上がる時には太陽の門という場所を通過する必要がある。咄嗟のことならこんな沢山足並み揃えて出てこれるはずが無いのだ。

皆はどう動いて、なっ!?

霊圧遮断探知装置で見つけること自体には成功した。成功した瞬間は作戦通りもし滅却師が出てこなかった場合のために撤退も出来るように皆が集まっていたが直後反応が全く別の場所にバラバラに転移していた。

こつち動きがバレてる!? でもそんな能力は知らないぞ!?

逃走経路が潰されると完全に詰むので機動砲台を隠して散り散りになった中で一番近い反応源の元に向かう。

急がな――

「!?」

心臓を何か貫いた。

「ゴブツ．．．お前．．．は」

ドクドクと勢いよく血が零れ落ちる心臓に走る凄絶な痛みを胸を押さえながら何とか振り返り敵を見る。

金髪の眼鏡の老人、ロバート・アキュトロンだ。滅却師における正解である完^{フオルシユテンデイツヒ}聖体の姿でこちらに銃口を向け更に射撃を開始する。心臓に穴が空いた状態ではそれを避けられる筈もなく脳天に一撃を貫き意識が断裂した。

「何スかあれえええ!??!」

突如として隊士が眠り倒れるという事態が起こってから瀧霊壁は降り護廷十三隊は瀧霊廷全体に警戒体勢を敷いた。同時に隊士が眠った理由の検査、敵の索敵が行われる。遮魂膜が突破された形跡が無いため外側からの攻撃と判断され瀧霊壁の辺りに重点的に戦力が置かれた。しかし敵は一向に見付からず現在、霊子の火柱が遮魂膜内側に乱立する異常事態に見舞われていた。

「煩いぞ大前田、敵の姿が見えんのか!」

「!? 何で遮魂膜の中に敵が居んだよおお!??!」

護廷十三隊の二番隊隊長の碎蜂はそれに驚愕しながらも火柱の内

から現れた侵入者の人影を認め、瞬時に戦闘態勢へ移行する。

それは巨大な男だった。黄色い覆面に白いマントを羽織っており横には子供を引き連れている。

「ここが尸魂界！ 悪党の本陣か！ ジェイムズウ!!! ワガハイの勇姿をよおく見ておくのだぞ！」

「ヘエイ！ ミスター！ あ！ あの羽織りは隊長デス！ 真っ先に倒せば聖十字騎士団で一番目立てるデスよ！」

「そうだなジェイムズよ！ ．．．という訳だ！ 10カウントで終わらせてやろう!!!」

巨体が碎蜂へと飛び掛かる。それを碎蜂は平時の用に冷めた目で見切りながら口を開く。

「舐められたものだな」

「何!? ヌオア!?!」

そして覆面の男、マスク・ド・マスキュリンの認識を上回る速度で視界から消え、真上から蹴りを見舞い地へと叩きつける。

「鈍い、先の言葉は大言だった様だな」

「ミスターの攻撃が避けられるなんて」

「ぬう、悪党めワガハイの正義の一撃を避けるとは．．．だが次は無いぞ！ とおう!! スター・ロケット・ヘッドバット!!」

即座に起き上がり勇ましく突撃するが。

「ふん」

碎蜂の神速の五連撃が炸裂する。凄まじい速度で地面に激突したマスキュリンの意識は完全に途絶えていた。

「ミスター!! っ?!!」

「貴様らは何者だ。語らぬのなら命は無いものと思え」

無論、語ったとしても命は無いがな。と脳内で付け加えながら眼鏡を掛けた子供、ジェイムズの背後で拳を構える。

「助けてくださいサイよ!! スーパースター!!!」

「視ていた筈だぞ、その——」

碎蜂の言葉を遮るように正面から謎の光が飛来する。

「スター・フラッシュユ！」

「何だと!？」

碎蜂は何とかそれを避けてその光の源へと目を向けるとそこには先に指一本すら動かすことの出来なかった大男が無傷で立っていた。

「ワガハイは『S』!」
「ザ・スーパースター英雄」のマスク・ド・マスキュリン!!!

声援が、助けを呼ぶ声が力となるのだ!!!」

聖文字、シユリフトユーハバツハが聖十字騎士団に与えた力でアルファベットを冠してその数だけ存在する。彼の場合は『S』、ザ・スーパースター。ジェイムズに声援をかけられる度に強くなりどんな傷でも完全に回復する能力。

当然碎蜂はそれを知らなかったがマスキュリンが動き出したタイミングがジェイムズが声を発したタイミングと重なっていたこととマスキュリンが声援について触れていた事からそれらの関連性を見出だしていた。

「キヤツ!？」

「ジェイムズ!？」

碎蜂は躊躇い無くジェイムズの心臓を貫き、捨てマスキュリンと相対する。

「つまり、こうすれば貴様は生き返れん。ということだな？」

「貴様・・・許せん!!」

.....

強化はされたがそれでも碎蜂の速度には及ばなかった。幾度も鬼道の直撃を受け膝を突いている。

隊長一人で片付けちまうぜこりゃ。何だよ・・・派手な割に大したことねえじゃねえか。ビビって損したぜ全く。.....

二番隊副隊長である大前田希千代はそれを眺めて勝利を確信する。

「ぐっ……！
スターが悪に屈するなど有り得ん……そう思わんか、ジェイムズ!!!」

「っ！……まさか!?」

「その通りデス！ 負けない下サイスーパースター！」

開けた穴が再生している訳ではない。だがそれをものともせず動いて声をあげている。

「何で生きてんだよ!?!?」

マスキュリンは声により更に強靱に進化し戦闘は再開される。二度目の強化を終えたマスキュリンは碎蜂の速度に対応出来るようになっており碎蜂にジェイムズを撃破する余裕は無くなった。

「大前田！……その子供を倒せ！……その程度ならお前にも出来るだろう！」

呆気にとられていた大前田は碎蜂の声に意識を取り戻し何とか答える。

「も、勿論っスよ！……こんな子供くらいちよちよいのちよちよいで伸せますよ！」

相手は子供。声に力はあるかもしれないがそれだけ。倒すのは簡単だと大前田希千代が考えたその瞬間。

「おいおい、子供相手に本気かよ。デブ」

「うわああ!?!?」

真後ろから何かが空気を揺らす音を聞き取り最速で跳び退くと頭があつた場所を矢が通過する！

「あん？……避けたのか。凶体に見合わねえ速さじゃねえか」

「あ、危ねえ……何モンだテメー……」

射線の先にいたのは金の短髪の男。白い服からは豹柄がはみ出ておりマスキュリンと同じくマントを羽織っている。

「俺は聖十字騎士団シャズ・ドミノ。与えられた力は……、ステイグマ聖痕だ」

聖十字騎士団、……等訳の分からない言葉をベラベラ喋る奴に反射的に意味を問おうとしたところで更に第三者が口を挟んだ。

「ちっ……面倒なことになりやがったな」

声に振り向くといつの間にか建物の上に白髪を逆立てた黒い外套

を着た男が斬魄刀を片手に、緑髪の白いライダースーツの女が佇んでいた。

そして

「卍解」

「鐵拳断風!!!」

「変く身!!!」

外套を脱ぎ捨て叫ぶと刀が変形しメリケンサック状になり風神を思わせるアーマーが腕と肩を覆い巨大な霊圧が辺り一面に轟いた。

もう一人は謎のポーズをとって顔に白い仮面を出現させる。

「卍解!?! この霊圧は虚?! 次から次へと意味が分かんねえよおお!!?!」

驚いているのは大前田だけではない他の四人も一時的に足を止めた。

そんな渦中の白髪の男、六車拳西と緑髪の久南白の双眸はマスクユリンに向けられていた。

「貴様、何者だ」

「六車拳西、テメエをぶっ潰す」

「私はスーパーヒーロー!!」

「何イ!!! 悪党がヒーローを騙るとは許せん!!」

未来からの因縁に導かれた二人とあと一人の戦いが始まろうとしていた。

未来の因縁と未知の領域

時間は少し巻き戻り滅却師出現直後、仮面の軍勢が集結している地点。

「『天挺空羅』が中断されマシタ。」

「どないなつとんねん！ 滅却師はもう出てきたつちゆうんか!？」

鉄の割れるような音に破壊された鬼道、あり得ない滅却師の出現タイミング。全員がその異常事態に混乱していた。

「姿は無く、霊圧も無い。これはこれは堅牢だね。だけど『音』は誤魔化せていないみたいだ」

「！」

声と同時に全員が始解状態に移行、拳西は『断地風』を振るい風の斬撃を声の主へ放つ。

「いい反応だ。尤も——」

「『神の歩み』」

至近の真後ろに音もなく完璧体状態のロボット・アキュトロンが銃を構えた状態で立っておりトリガーを引いた。

「僕に注意を向けた段階で事は既に終わっているけどね」

銃口から放たれたのは散弾。一面を覆うほどの弾の全てを咄嗟に避けることは出来ず幾つか直撃する。しかし痛みは無い。当たったのは弾というより青い絵の具の様な何かだった。

だが、ただそれだけで終わる筈が無い。青は光を放ち形を変えていく。変化した後の形は足跡。

「何やねん!?! どない——」

青が極限まで輝きを放ったとき全員の姿がその場から消えていた。

「ぐおっ!?! ちっ、あの野郎」

光と青が消えた時には視界に映る建物群はその様相を変えず瀟々

廷内部。しかし周辺に待機させていた霊圧遮断車は無い。瞬時に転移させられたことを理解した拳西は周囲を把握しようとするがそれよりも早く声が投げ掛けられる。

「君は確か仮面の軍勢の六車拳西だったね」

「ッ!?!」

後ろからの声に即座に飛び退き断地風を振るう。先とは違い確かに直撃するが一撃が起こした砂塵の中には無傷の男が立っており構わず言葉を続けながら突っ込で来る。

「転移か、ガブリエリは成功したんだね」

「てめえ」

こいつは確かツァン・トウ蒼都ツァン・トウって名前の野郎だったか。

瞳の語った特徴のフードとフラットシューズ、鉤爪と顔の傷全てが当てはまっている。攻撃が通じなかった原因は彼の聖文字「鋼鉄ジ・アイアン」による硬化だろう。

瞬時に仮面を付け蒼都の一撃を往なしてから始まった戦闘は拮抗している。聖文字の影響で攻撃は通りづらいが元々双方が体術を極めていいる所に虚化による身体強化分拳西が密かに機動力で上回っている。

「あ、拳西いたー！ 白く虚閃キーツク!!」

間違った場違いな声が割つてはいる。声の主は久南白、彼女が転移した位置は屋根の上で周りに聖十字騎士団も居なかった。そして霊圧遮断探知装置で近くの味方を探したところ拳西に行き着いたのだ。

放たれた白の虚閃を拮抗した戦闘の内にはいた蒼都は避けきれず直撃する。

「ぐあっ!?!」

直撃し吹き飛ばす蒼都にすかさず追撃に断地風を五度叩き込む。これには「鋼鉄」でも受けきれなかったようで胴体に深い切り傷ができ、血が地を濡らしていた。

そんな彼の遠方上空、別の滅却師が死神と交戦している姿が見える。その滅却師の特徴には見覚えがあった。マスク・ド・マスキュリン、元々滅却師との戦いに備えて対応すべき順位が決められていたが

その内でも上位に位置していた男だ。何故なら能力により際限なく強くなり続ける。元々能力について理解していれば対応は出来るがそうで無いなら手が付けられなくなる。見たところ応対しているのは仮面の軍勢ではなく隊長、明らかに不味い状況だった。

聖十字騎士団は殺せばユーハバッハの糧となる。そのため死なずに気絶させ続ける必要がある。虚用スタンガンのようにこれに対しても専用武装が製造されていた。海渡町瞳は停止装置と呼ぶそれは虚用スタンガン開発のために使われたこともある組成解析装置を更に改良した瞬時に相手の状態を解析する装置と虚の因子と光の矢を流し込み体内の虚因子濃度を調整する装置を合体させたものだ。

滅却師は虚への抗体を持たず虚化という事象が起こらず死ぬ存在だが中でも聖十字騎士団は第六刃グリムジョーに心臓を穿たれても喋る余裕を見せていた者がいたり、星章化という技術で死神から奪った卍解を侵影薬という薬で一瞬虚化させた時も卍解と肉体の接地点は一部崩壊しその部位に傷が付いた(例を挙げると本編で侵影薬を喰らった際、蒼都が奪った大紅蓮氷輪丸で出現する氷の片翼だけが崩れ背中のその位置から血が吹き出した)が全ての崩壊まではタイムラグがあったり一応少しなら耐える事が出来るようでそれでも弱点ではあるから虚因子をちよつと注いで光の矢で消すことを繰り返し返せばある程度深いダメージを負った滅却師なら気絶に追い込めるのだ。拳西はそれを蒼都に喰らわせると白もマスキュリンに気が付いたようで大声を出す。

「あー！」

白は優先対応順位を高い奴を倒せば目立てるランキングと勘違いしているので真っ先に飛んでいく。

「待ちやがれ！」

それに拳西が追隨して現在に戻る。

「なっ!? 貴様らは浦原喜助の……何を——」

拳西達を見た碎蜂は過去を思い出し怒号を上げようとするが真横から飛来した神聖滅矢ハイリツヒ・ブフアイルがそれを中断する。

「マスキュリン、お前の興味がそっち行つたなら俺がコイツ倒して良いか?」

「構わんぞ! ワガハイはこの悪党共の滅らず口を叩き潰すのに忙しいからな!」

「つてな訳だ。掛かってこいよ、隊長とあとそこの副隊長?」

「貴様!」

双方二対一で状況は確定し仕切り直された戦闘がまた始まる。

「白く虚閃スラッッシュ!!!」

先手を仕掛けたのは白、虚空にチョップをするとその場に三日月型の虚閃が現れマスキュリンに飛んでいく。

しかし直撃コースにいたマスキュリンの姿が消え、

「スター・ダブルパンチ!!」

二人に神速のパンチを直撃させた。

遠方吹き飛ばされた二人の内、拳西の方にマスキュリンは超距離の跳躍からの膝での飛び蹴りを喰らわせようとするが何とか回避。

しかし受けた一撃のダメージは大きくそもそも動きを認識することが出来なかった。

「む、外したか」

くそッ既に力も速さも俺を上回ってやがる……!

「次でトドメを刺してやろう!」

なら、攻撃の起こりを見切るしかねえ……

「スター!」

攻撃の踏み込みが始まった瞬間に「鐵拳断風」の刀身を地面に叩き付ける。すると地面に効果の無限の衝撃で叩き込まれ自分の足場ごとマスキュリンの足場が消滅する。思い切り踏み込んでいた地面が無くなったマスキュリンはその場で転倒してしまう。

「ぬおおオオオオ?!?!?!」

隙だらけになったマスキュリンの脇腹に無限の衝撃を喰らわせる。

「ごああアア!!？」

最初は背を上にも倒れていたマスキュリンの体は痛みで浮き上がりすかさず鳩尾に一撃を叩き込む。それで前のめりになった顔面に渾身のアツパーカット。

力も速度も上の相手に出来ることは何もさせずに叩き潰すこと。その実践は成功した。

「片割れはどうなってやがる?」

ジェイムズを探し拳西は移動を開始した。

一方シャズ・ドミノは碎蜂と大前田に圧倒的優位を持って立ち回っていた。

「てめえらの始解も何もかも俺の静血装には無力だぜ?」

滅却師の内の特に純血が発現しやすい力、ブルート血装”。それには二つの種類がありその名も ブルート・アルテエリ動血装” ブルート・ヴェーネ静血装” 前者は攻撃力を底上げし後者は防御力を上げる。静血装” は大半の隊長の始解を無傷で受け切る程の性能を有している。

「縛道の三十『しとつさんせん嘴突三閃』」

「無駄だぜ。そんな柔なモンは簡単にバラせちまう」
「なッ!？」

出現した黄色い三つの牙は碎け周辺の空に光球として変換される。シャズ・ドミノの今の聖文字は “V” だが元々 “V” の “生存能力” だった。今もその能力自体は変わっておらず負ったダメージを周辺からかき集めた霊子で癒す。そのかき集める能力だけを作用させ劣化 “聖隷” のようにし縛道を分解した。

今、ドミノはジェイムズを小脇に抱えながら空に霊子の足場を作り立ち、碎蜂達が上がって来ようとしたらその為に作る霊子の足場を分解することで遠距離攻撃しかそもそも届かない状況にしており鬼道ぐらいしか通じないがそれすら分解される。

「卍解」

「雀蜂雷公鞭!!」

隊長最後の切り札である卍解、特に碎蜂は射撃タイプで巨大な金色のミサイルを相手に放つので距離がある相手にも大火力を叩き込める卍解だった。

「漸くかよ。遅えなあ」

ドミノが懐から小さな鉄の円盤を取り出すと卍解が砕け吸い寄せられていく。

「何!?!」

そして全てが内に収められる。

「卍解を奪ったのか」

驚愕する碎蜂を無視して飛び去ろうとしていた所に拳西が到着する。

ジェイムズを確認した瞬間飛びかかるが霊子の足場を分解され地に落ちる。

「まさか、ミスターを!」

「まさかやられやがったのかマスクュリン。最初は圧倒してるように見えたが気のせいだったか?」

「ま、どうでも良いか。ほら送ってやれよ『声援』ってヤツ。お前が叫べば何処にいても発動するんだろ?」

「ヘエイ! 助けに来てくだサイ! スーパースター!」

遠くに光の柱が立ち上る。移動を始めたそれは建物を物ともせず通り道全てを蹴散らしながら拳西目掛けて接近し一瞬で到着、拳西を上空へ蹴り上げた。そのマスクュリンの姿は大きく変わっておりマスクは黒に赤いライン、上裸で黒の短パンとグローブを着用している。

「マスクュリン、ジェイムズ返すぜ」

「む、そうだったな。感謝する」

「気にすんな、俺は行くぜ」

ジェイムズを放り投げ何処かへ走り去るドミノを見送り拳西へ向けてマスクュリンは飛び立った。

そして遙か上空、一撃を受けた拳西は一瞬の意識の断裂から立ち直りマスキュリンを待ち構える。

すると空気が震える音が聞こえる。

「!?」

脳内の警鐘が鳴り響いた拳西は咄嗟にナツクル状の刀身二つを衝突させ、衝撃で後ろに飛ぶ。

そうするとさつき体があつた位置に竜巻が通過する。これはマスキュリンのあまりの速さに姿が認識出来ずに起こした風の揺らめきを竜巻と誤認したのだ。それ程までにマスキュリンと拳西の力の差は歴然だった。

そして、

「ぐっ。」

避けきれてはいなかった。両腕に無数の切り傷が発生している。掠めただけでもダメージになり得たのだ。

「運が良かったな！ 悪党よ！ しかし次はないぞ！」

そこから続く認識を越えた連撃を技前にわざわざ言う技名から起こりを何とか察してギリギリの所で直撃を避け続ける。

体はズタズタになり続けもう血塗れだ。

「真の力を解放したワガハイの前には無様に逃げ惑うしか出来ぬだろう！ しかし、終わりだ悪党よ！」

言葉の後、力を溜める動作をすと蒼い光のマントと頭の後ろに星形の光が出現し拳西の上空で空に巨大な星を高速で描くとその中心で止まる。

「この蒼い神の意向こそ正義の証！ この姿と共に放たれるワガハイの必殺技により貴様を滅却してやろう！」

「スター・フラッシュ」

技の発動直前、拳西は先と同じく無限の衝撃を利用した移動を行い、マスキュリンの真上に飛び射程圏外に逃れつつカウンターを決めようとするが、

「逃がさんー！」

直ぐ様全身を回転させ拳西へ向き直る。

「スーパー・ノヴァ!!!」

「舐めてんじゃねえ!!」

マスキュリンの顎を蹴る。ダメージを目的にする訳じゃない、相手を蹴って空中にある自分の体をスラしたのだ。

必殺技の光が虚空を捉えた隙に両腕で殴り付ける。しかしまるで堪えていない。

「最早貴様の攻撃など埃に劣る！　しかし、ワガハイの必殺技をよくも———なんだとオオオオオオオオ!!!」

「おおおおオオオオオオオオ!!!」

拳西は虚化していた。!!!!

本来虚化のための内在闘争と正解による負荷の両方に対応することは出来ない。しかし、瞳からの未来での強敵達について聞いた一部の仮面の軍勢は死に物狂いの特訓の末、最大一秒間の正解虚化を可能にしてみせたのだ。

「ゴッおあアアアアアアアア!!!??????」

二つの力を束ねた一撃の威力はマスキュリンの身体強度を上回り全身に炸裂する。

全身が内から弾けるような痛みで絶叫していたマスキュリンはやがて気を失い、

「ふっ飛べええええええ!!!」

地面へと叩き落とされる。

超上空から降り注いだマスキュリンは巨大なクレーターを作って気絶していた。

「………まだ生きてやがるのか。頑丈な野郎だ」

地面まで降りてきた拳西はマスキュリンに毒づきつつ停止装置を

突き刺す。

卍解を解き何処かへ飛ばされた白を探そうとした拳西の足元に何が落ちてくる。

それは傷だらけの白だった。

そして更に周辺に人影が降り立つ。

蒼都だ。既に倒した筈の敵だった。

「てめえは」

「ああ、本当に危ない所だった。完聖体を発動させなければね」

そう言う彼の背中には歯車のような翼があった。完聖体を発動するとそれぞれに特徴的な霊子の翼が出現する。

全身傷だらけで動くのも苦痛な程の体を何とか動かし「断地風」を振るう。通じないのは分かっているが振るわない訳にはいかなかった。

それを蒼都は握り碎いた。バキンと鉄を砕くような音と共に。

それに驚くより先に鉤爪の斬撃が拳西を切り裂き倒れる。

「彼女は君の大切な存在だろう？ 共に生きたものは共に死すべし。僕の流儀でね。並んで死んで貰うよ」

そして最後の一撃を振り下ろそうとした時、

「その変な流儀のおかげでこっちの仲間はずな死なずにすむわ、ボケ」

後ろからの斬撃を勘で聖文字と静血装を合わせて防ぐ。

「仮面の軍勢、矢胴丸リサか」

仮面と一撃の威力の高い始解、**「鋼鉄」** だけならダメージを負っていただろう。

「仕留めるつもりで斬ったんやけどな。お前やろ、通信鬼道潰して回ってた奴は」

横槍に次ぐ横槍、戦線は混迷を極めていた。

未知には未知を

矢胴丸リサは強制転移の直後に霊圧遮断探知装置を利用し周辺の仮面の軍勢へと近づく途中、空を走るように生成される鉄線とそれが無数に分岐する直前の一点を砕く白い線を見ていた。

砕かれる音は有昭田鉢玄の鬼道が中断される際に聞いた音と同じだったため、原因をそれと判断した。そして近くに居た仮面の軍勢、鉢玄と合流した後に他者が『天挺空羅』を利用した可能性も考慮しつつ確認を取ると予想は的中、鉢玄は転移後も『天挺空羅』を試しているそれを中断されていた。

その後更に合流した羅武とひよりにこの件を伝えて二手に別れて『天挺空羅』破壊の原因の中核の鉄使いの撃破と片割れの足止めまたは撃破のため行動を開始した。

『天挺空羅』を鉄に変える姿が上からよう見えてたわ」

リサと鉢玄は鉄線の発生源を担当した。未来の知識において鉄を操る滅却師に該当するのは蒼都ただ一人。目的が明確な搜索は早々に終わるがそんな彼女らを待ち受けていたのは瀕死の拳西と白。何とか止めには間に合い今から治療をすれば死なない。そのためには付近にいる蒼都をここから離す必要がある。しかし最大火力の始解併用虚化の一撃ですら守りを破れなかった以上このままではそれを為せない。

「それで僕を討ちに來たのか。だけど残念だったね君の攻撃は僕を傷つけられない」

見えざるの帝国の隊員はユーハバツハから敵勢力に関する情報^{データ}を受け取っている。それには細かい能力の記載がされている。虚化と始解はこれ[?]までのリサの最大火力であることは割れていた。

「今のままやったらな」

「何だって。」

何か隠し球があるのか？ だがそんなものは情報には無かった。ハツタリか、それとも

仮面の軍勢は死神の集団だ。そんな彼らが虚化以外に自らを強化

する方法は一つしかない。

思索を巡らせた頃、リサは既に口火を切っていた。

「卍解」

「怠象壊鉄漿蜻蛉」

始解で出現していた特殊な穂の槍から垂直に二対の刃が生える。

そして、隣り合った二枚の刃が音を立てて重なり一対の翼の様になった時、

「なッ——」

衝撃が顎を殴り抜けた。

鉄と鉄がぶつかり合う重低音が響き蒼都の体が彼方へ飛ぶ。

「鉢玄、拳西と白頼むわ」

「はいデス」

短いやり取りのあとリサは蒼都が飛んでいった方向へ向かった。

「くっ」

ズキリと痛む胸を押さええず立ち上がる。しかしそんな蒼都の胸には一見傷は無い、先の攻撃は静脈脈を掛け続けていたため傷にはなり得なかった。原因は更に前の白と拳西の攻撃、治療が出来た訳では無かったのだ。

彼の完聖体の力は手で触れた物を鉄に変換する力、そしてそれらを自身の体含めて自在に操ることが出来る。それを使って血管や体表の傷を殆ど繋がらした様な状態で固定した。しかし治ってはいないので痛みはそのまま。

何が起こった

身を起こし向かってくるリサを見据えながら先の異常を考察する。

攻撃を認識出来なかった。アキュトロンの様な瞬間移動で接近されたのか？

「だとしたらわざと受けて即座に斬り返す。リサは彼女の持つ槍の組み合わせでは必ず蒼都を捉えられない離れた位置で止まり槍を振り上げる。」

それに備えて蒼都も鉤爪を構える。

「!」

槍が振り下ろされるとその途中でリサの姿が目の前に現れ攻撃が直撃する。

それに合わせて鉤爪を振るうが、

「消えた。何処に!」

鉤爪は空を裂く。瞬間移動を警戒し周囲を探るがリサがいたのは攻撃を放つ前に立っていた、寸分違わず同じ場所に。

余裕のつもりか。——ッ!

思考を待たず更なる連撃、その全てで同じ様に攻撃を受け、鉤爪は空を裂き、同じ位置に戻る。

不味いな。

傷から血が流れ始めている。自身の身体の鋼鉄化に霊子を通すことで爆発的な硬度を手に入れているが幾度も積み重なった槍による衝撃は鉄を細かく歪めた。繋げたかのように形を整えた血管達は歪みによって血を溢したのだ。血管は繊細で雑に変形させれば自分で自分を殺しかねないため、今また整形し直すことは不可能だった。

「だけど動きは読めてきた。攻撃の振りを見れば避けられる。」

リサの転移位置は常に真正面だった。そして戻る位置も同じ、だからこそ蒼都は回避から戻る位置への遠距離攻撃を敢行しようとしていた。

そしてやって来た一撃を回避し滅却師の通常射撃技の神聖滅矢以上の威力を誇る技を放つ。

「蛇勁爪!!!」

握られた両手を上下に手の平側を合わせて放たれた光線は転移から戻ったりサへと直進する。

「!」

しかし光線は曲がった、まるでリサを避けるように弧を書いて。蛇勁爪を曲げたのか。近づくものの軌道を曲げる力なら僕の力は意味を為さない。思考する間も血は流れ続ける体と思考が時間と共に鈍化していく。蒼都が戦うことの出来る時間はもう殆ど残っていない。逸らされて一撃を貰えば怯んだ隙に連撃を喰らうだろう、接近は愚策だ。離ればあの転移攻撃を使うだろうあれを続けるなら僕の完聖体よりも卍解による消耗が上回る筈だ。それまで意識を持たせるしかない。

「破道の六十三『雷吼炮』」

卍解ではなく鬼道による左手からの攻撃。標的は蒼都とは違い地面。

視界を遮る気か――！

その真意を理解する。視界を遮られれば攻撃を避けられなくなる、だから雷を消し去らなければならない。

最速で蛇勁爪を放てばあの雷を跡形も無く消し去れるがリサは空いた右腕で槍を構えている。

既に詰んでいた。

「くそッ」

それが分かってしまっても止まれる訳がなかった。

「蛇勁――」

しかし行動は虚しく順当に槍の穂先が胸を捉えた。

息吐く暇もない十連撃が蒼都を打ち、遂に動かなくなった。リサはそれに向けて停止装置を振り下ろすが、

「お前の行動に異議がある」

自分に突き刺していた。

「何——」

疑問を口にするより早く頭を何処からか飛来した神聖滅矢が打ち据えた。

倒れる蒼都の付近に新たな星十字騎士団が降り立つ。金と紫に染まった髪を持つ男、該当するのは一人しかいないベレニケ・ガブリエリ。聖文字は『Q』の『異ザ・クエスチョン議』。
「酷い様じゃないか蒼都」

気絶している蒼都に話し掛ける彼の向こうで倒れるリサが身じろぐ。頭に受けたが矢の出力は抑えられていたようで生きてはいたが頭蓋を激しく揺らされ立つこともままなっていなかった。

「おや、まだ意識があるのか。凄かったろうさつきの一撃。音が視えればあんな芸当が出来るのさ」

「戦う気なのは結構だけど今回は見逃してあげるよ。お前達は面白い存在だし、態々更木剣八から乗り換えただ。見合うように活躍してくれないと」

「僕の計画の為にもね」

そう言って立ち去った。

蒼都の撃破により通信鬼道の中断から解放された。その後リサも復活し遠方で治療中のハッチにそれを伝え『天挺空羅』を発動する。

『天挺空羅』や！」

「成功したんだ！」

殺されてから何時もの如く赤ちゃんに蹴飛ばされて復活した僕は平子さんと合流し、未来における滅却師との戦いで的一般隊子以外の数少ない死者の護廷十三隊総隊長山本元柳斎重國の元へと急いでいた。

卍解を奪う星章化と用意された偽物のユーハバツハに消耗させられたことにより未来で彼は死んだが卍解を奪われなければ勝利出来たと考えられる程に彼の卍解は圧倒的に強い。

侵影薬は既に浦原さんが開発しており貰ってきた。殆どは霊圧遮断車に置いていて残りの少しは非常用に仮面の軍勢それぞれに分配されている。それを届けようとしていた。

これなら何とかかなりそう良かったあ

少し安堵していると上空から爆発音がし熱風が全身を包んだ。

同時に何か地面に激突する。

「あれは」

地に伏すのは氷の翼が生えた白髪の少年、護廷十三隊十番隊隊長日番谷冬獅郎だった。

「てめえらは——」

「オイオイ、数が増えたと思って見てみりや仮面の軍勢じゃねえか。丁度、氷の隊長サンじゃもの足りねえと思つたところだぜ。纏めて相手にしてやるから掛かってこいよ」

付近の屋根上から完聖体のニワトリの様に赤く逆立った髪の毛の滅却師、バズビーが日番谷の疑念の言葉を遮り宣言した。

叫谷落とし

「仮面の軍勢、虚の力を得た死神か。有意義なデータを期待する」

愛川羅武と猿柿ひよりの二人が向かった先にいたのは全身機械仕掛けの滅却師、BG9だった。ベージェン

「よく知つとるやんけ木偶人形、叩き潰したるわ！」

「凄えな本当に全身ロボじゃねえか」

BG9の武装は近代的でガトリング、ミサイル等を駆使し更にそこで生まれる隙を潰すように飛ぶ柔軟性と貫通力を併せ持つ謎の紐みたいな物で攻撃を仕掛けてくる。

だが直接攻撃系始解+虚化した二人の出力はそれを薙払い本体に肉薄する。

「予測以上の数値だ。素晴ら——」

「こんな追い詰められても口減らんのかいな。機械やから恐怖を感じへんってヤツなんか？」

「火吹きの小鎚!!」

羅武の始解は「天狗丸」という名を持つ伸縮可能な棍棒だ。火炎球を放てるがそれを火吹きの小鎚と言う。それを叩き付けて回り込んでいたひよりの始解の「首切り大蛇オロチ」という蛇腹剣での追撃、更に続けて姿勢を崩したヤツに連撃を叩き込み地面に打ち下ろす。

「データ収集、解析完了」

その衝撃で巻き上がった砂埃が二人の視界を覆う最中、奥から音が響くと同時に光の柱が砂埃を払って現れる。

「!」

その内に佇んでいるヤツは背中からは三対のロボットアーム、頭上には他と同じく星形の光を伴った姿に変わっていた。

「奥の手か、けどよその傷でまともに戦えんのか？」

BG9の損傷はそう言われる程激しかった。頭、胴は斬撃により抉れ右腕に至っては切断されている。

機械だからか余裕故か、それに動じることなく悠然と平坦な音を響かせる。

「無論だ。この身は既に血肉を超越した」

ギヤギゴゴ、と鉄が折れ曲がるような音を鳴らしながらフレームが修復され出す。

「んな隙見逃す訳無いやろー！」

完治を待たずに踏み込む二人を見つめてヤツは左腕を振りかぶる。

同時に左の掌で何かが生み出されていく。

「それは、俺の!？」

「天狗丸」だ。大気を震わす炎を纏いそこにあつた。

振り抜くと炎は火球として飛び出し二人を迎え撃つ。それは紛れもなく「火吹きの小鎚」。

「火吹きの小鎚!!」

前傾姿勢で突き進んでいた状態から姿勢を無理矢理変えて同じ技で相殺する。

相殺で発生した余波を物ともせず最速で接近し斬りかかるひよりにB G 9は天狗丸で対応する。

完聖体によって出力が向上したことにより贅力は拮抗し、鏢迫り合いが起こる。

そうする間にも修復は続き再生された右手には今度は「首切り大蛇」が握られている。

隙だらけのひよりを穿とうと突きが放たれるがそれをすかさず羅武が横合いから剣の腹を叩き弾く。

「忘れてたかよ?」

「いや、予測通りだ」

ガゴン、とB G 9の腹部の二箇所から何かが突き出る。

「な——」

更なる天狗丸が握る腕ごと出現し二人を突き飛ばした。

B G 9は体を変形させミサイルを生み出し、追撃に放つ。二人は何とかそれは回避するものの回避した先には既に何故か伸縮した腕による攻撃が置かれていた。

「解析は完了していると言った」

「この「The knowable」の下にもう逃げ場は無い」

同時刻、バズビー周辺

「どうも！ 僕達その火使いが言ってるように仮面の軍勢です！ さつき天挺空羅送られたでしょ？ あれ僕達が送りました！ 手を貸します！」

天挺空羅によって送ることの情報容量的に仮面の軍勢のことは説明出来ていない。あつちからしたら怪しさ100万点と言ったところだろう。こつちに攻撃を飛ばされると困るので事実を伝えようと日番谷冬獅郎に情報を叩き付ける。

「言ってる場合かよ？」

「バーナーフィンガー1」

バズビーの人差し指から炎の弾丸が僕へと伸びる。

「のわっ!？」

体を捻って避け、ついではばかりにバズビーに到達しようとする光をねじ曲げ視界を塞ぎ雷撃を見舞う。

「話の途中なんだけど腰折らないでくれる？」

「オメーこそ戦いの腰折ってんじゃねーよ」

「バーナーフィンガー2」

雷の激しい音を頼りにしたのかまるで見えてるかのよう電撃を人差し指と中指を合わせてそこから爪の向きに沿って現れた炎の線で斬り払う。

「中斷したのはそつちだと思っけど、ねー、平子さん？」

バズビーは暗黒空間から抜け出し炎の線で僕が居ると見えているであろう虚空を斬り裂いた。

「せやな」

そう、逆撫の能力だ。さつき視界を塞いだ時に動いたのは僕だけではなかった。

「まア、もう終いや。話す時間すぐにでも出来るで」

「はは、ですね」

「ハッ、もう終わったつもりかよ」

「まあね、平子さんの力は喰らった僕がよく知ってるさ」

バズビーは僕達に攻撃しようと技を繰り出すが掠りもしない。

「ちツ、鬱陶しい能力だぜ」

「じゃあねー！」

二人の攻撃はバズビーを捉えるが体表と衝突した刀身はピタリと動きを止め刃はそれ以上進まない。よく見てみると皮膚に青い光を放つ模様が浮かび上がっている。

「効かねーよ」

静血装か、それなら。

「ホンマにそうか？」

突破するため虚化を発動しようとしたとき、

「氷竜旋尾」
ひょうりゅうせんび

氷の斬撃がバズビーを地に落とす。

「日番谷さんー！」

「瀨霊廷の危機だ。四の五の言ってる場合じゃねえみてえだからな――」

「――」
「竜霰架」
りゅうせんか

そう、告げ刃先をバズビーに差し向けると十字架状の氷塊が彼の全身を覆いきる。

「凄い――」

流石隊長、一応僕にも氷系の斬魄刀はあるけど足元にも及べないくらいに凄まじい出力だ。これならアイツだって

.....
ピキ、と氷がひび割れる音がする。

その音は時間をかける程に頻度が、音量が増していき遂に碎け散った。

「なん、だと――」

姿を現したバズビーは家屋に手を付けており口を開けた。

「バーナーフィンガー!!!」

「3!!!」

「帯が溶岩の海と化す。しかし海は地を覆うだけで空には届かない。はずだった。」

「バーニングストンプ」

足裏から発生された高熱によって起こった高熱の業風がマグママグマを空へと巻き上げ、彼の周り全てに散りばめられる。

「群鳥氷柱!!」

日番谷がそう言って放った複数の氷柱は溶岩を凍らせるどころか瞬時に解け消える。

「これでテメエらの攻撃は俺に届かねーぜ?」

「へー、でもそっちかって攻撃出来ないんじゃない?」

そう煽る頃にはバズビーは手を伸ばし指先を揃えて炎を噴き出させて言う。

「バーナーフィンガー」

「4!!!」

炎が刃を型どり振るわれる。

「な——」

コイツには広範囲の攻撃が無いと思っていた。だが違った。

視界を満たす炎があった。

何この範囲。バーナーフィンガー4は炎の刃っただけじゃ無かったのか!?

資料は結局のところ文字列でしか無かった。力量を正確に計りきれぬものでは無かった。そしてバーナーフィンガーとは指から放たれる火を使う技だ。そして今の技は指4本で両手の指の総数は10本なのだから勿論、2刀同時に操れる。

「あっぐっ!?!」

続く一撃が両足を焼ききる。

次の瞬間には修復される。

僕の斬魄刀には治療を可能とするものもある。大体の傷は瞬く間に治せる、自分限定だけど。

「はあ。はあ。こんなの何度も撃たれたらどうしようもないぞ。」

他のみんなは傷は無いようだけど日番谷さんは氷の翼の片方が挟れている。このままでは直撃する可能性も高い。

持つかは分からないけどこの再生と虚化で突っ切ってみるか？

そう考えたとき後ろから何かが風を切る音が聞こえる。

「なん」

言葉を遮って衝突音が地を鳴らす。

「何よバズビー、手こずってんの？」

「違えよ終わるところだ。横取りはさせねえぞ」

その音とは別の方向から声がする。

その方向に振り替えると完聖体状態の黒髪の滅却師がいた。

名をバンビエツタ・バスターバインというその滅却師の能力は

ジ・エクスプロード

「爆弾」彼女が放った霊子弾に触れたものは全て爆弾になる。そして彼女の爆弾で吹き飛ばされたであろう墜落した二人は狛村左陣と東仙要でどちらも隊長だった。

その片割れ人狼で顔が完全に狼の死神の狛村左陣は何とか立ち上がる。

「え、まだ生きてんの？ ガンジョーなんだね。狼だから体の造りが

違うってワケ？」

「元柳斎殿が戦っておられるのだ。地に伏せているつもりは無い――

――!?!」

ここまでの間はずっと総隊長、山本元柳斎重國の莫大な霊圧が感知されていた。だがそれが突如激減した。

それに気付いた時には体が勝手にそこへ向かって動いていた。

虚化し、響転で突き進む。

あり得ない。ユーハバツハの力も画策も既に知っていたんだぞ!?

卍解だつて奪われてない！ 負けるはずが――

「お前の移動に異議を唱える」

「!?!」

体が逆行する。進もうとすればするほど後ろに下がる。

何が!?

「行かせる訳にはいかないな。奴にはここで死んでもらうよ」

「お前は——」

ベレニケ・ガブリエリが真下から声を掛けてきていた。

彼に向けて雷撃を放とうとすると視界が少し暗くなる。

彼が何かしたのだらうと思いきや、質そうとして止める。アイツの顔には困惑の表情が浮かんでいたからだ。

僕を見ておらずその上、空を見ていたので釣られて振り返ると空に

あったのは目のような形の孔。奥には黒が拡がっている。

僕はその黒を知っている。

「黒腔・なのか？ 誰がこんな」

それはとても巨大で地上はまるで夜のように暗くなっていた。

そしてそこから何かが墜ちてくる。

それは球状の霊子の塊、黒腔にあるものの内一つ該当するものがあつた。

「叫谷か」

巨大なそれが幾つも墜ちる。そしてまた別の場所から轟音が響く。

「次は何つてあそこは」

山本元柳・斎重國がいる方向にまだ空から墜ちて来ている途中であるはずの叫谷が地面から迫りだしていた。

「どうなっているんだ。ここは一体どうなってしまったんだ!？」

「僕が聞きたいぐらいだよ！」

声を荒げるガブリエリに向いて叫び返してみると気付く。僕の後ろの方向から強い光が放たれていることに。

振り向くとあつたのは巨大な光の槍とも言うべきもの。尸魂界の壁から迫り出している。

「な——」

そして景色が、世界が廻った。

「う．．．あれ？」

「そして再び目蓋を開くと青空が広がっていた。いや、よく見ると幾つかの孔とそこから見える黒があった。

また黒腔か？

しかし少し様子が違う。よく見るとそれは黒腔によって出来た綺麗な目のような形の孔ではなく、むしろ破られて出来たものに見えた。

辺りを見回すと場所が判明する。一面の砂と白い建物群、虚夜宮だった。そして周囲には滅却師が倒れている。バズビー、バンビエツタ・バスターバイン、ロバート・アキユトロンの三名。

寝ぼけていたからか「そっかそういえば空の孔は四つあったなあ」とか思っていたがだんだん意識がはつきりしてくると顔面から血の気が失せ出す。

「え．．．どうなってるの．．．これ」

「一切合切意味が分からなかった。

虚圏乱戦篇

天蓋の下で

尸魂界での激戦の最中に起こった謎の現象で虚圏にいた僕。周りには多分同じような境遇で漂着したであろう三人の滅却師の三人のロバート・アキュトロン、バズビー、バンビエッタ・バスターバインが倒れている。

状況を整理してみたけど、やっぱり何これ。滅却師が巻き込まれたってことは聖十字騎士団のせいじゃないんだろうけど、だったら誰が？

藍染の勢力はまだ崩玉の位置を把握してるとは思えないから死神がいる中で仕掛けられる段階な訳ない……

あと周りはどうなってるんだ？ 大きな霊圧がぶつかり合い過ぎて識別出来ない。戦ってるのか？ 皆は……

「何だ、お前でさ、え心当たりが無いのか」

「——その声は！」

斜め上の方から僕に喋りかけるのはベレニケ・ガブリエリ。瞬時に臨戦態勢に入りつつ問う。

「何でいるの？ というかお前でさえって何」

それを聞いた途端に元々あつた薄い笑みを更に深める。勿体ぶるようにゆっくりと口を開いて短く告げる。

「未来の知識」

「え？」

「あり得ない言葉が聞こえた。」

「聞き間違い？ いや、なら何を聞き間違えた？」

「何でいるのかと聞かれれば分からないと答えるしかないけど、近く

にいたからという予測は立てている」

頭が真つ白になりかけてガブリエリの喋りが頭に入つてこない。

「何で、知って。」

「その返答は良くないな、この言葉が正解だと言っているようなものだと思っけどね?」

「ッ!」

その言葉にハツとさせられながらその上で真相が気になった。

「露骨な反応だね、知っていたとはいえ腹芸が苦手にも程がある。僕は確信を持つて言葉にしたから意味がなかったけど次からは気を付けた方がよい」

「だから何で知つてるんだよ!」

「ああ、話していなかったねそういえば、僕の眼はね音が見える」

「音が、見える。」

何だ、それ、ローズさんみたいな感性の話? それともまさか

「ああ、まさかの後者さ。物理的に音が見えている」

え、今、声に出てた。

「微弱な音も研ぎ澄ませば拾い上げられる。聖文字による才能の強制開花に引つ張られてか昔より強力になってね、脳内に響く音から何を考えているか分かる。お前の思考は筒抜けさ」

影からの監視をガブリエリが一度でも担当したことがあつたなら
これまでに殆どが筒抜けだったってことになるのか

「そこは安心して良い。誰にも言つてないからね」

「痛つた、どこよ(こ)」

後ろから女性の声が聞こえる。4人いる聖十字騎士団で該当するのは、ハンビエッタ・バスターバイン。

「虚夜宮だね」

「げ。」

僕との会話を区切つてバスターバインに声をかけるガブリエリ、彼女は、その声を聞いた途端に嫌そうに顔を歪めて反応する。

「この事象に心当たりあるかい?」

慣れているのか気にした様子もなく更に言葉を投げ掛ける。

「つてあんたは！」

そんなガブリエリを無視して後ろにいた僕に反応する。

「さつきぶりだね爆裂滅却師」

起きたのか。ガブリエリを問い詰めたいけど聖十字騎士団と戦えばそれどころじゃなくなる。どうすれば切り抜けられる？

「これ、あんたがやったの？」

「いや違う、そうだったら態々お前たちの前に出てこないから」

「それもそーね」

「じゃあ、あんたを殺してワンちゃん探しに行こーつと」

「！」

素立ちの姿から放たれた神速の斬撃、体をなんとか反射させて光の操作で隠していた刀を出現させ打ち合わせる。

「どこから出したのよそれ」

「企業秘密」あと僕達戦ってる場合じゃないと思うよ」

一撃が重い！ 流石は聖十字騎士団って感じた。

ミシミツと僕の斬魄刀が悲鳴を上げ、ジリジリと刀身がこちらに迫ってくる。

「命乞い？ ダツサ」

「外の霊圧を感知して分かったんだけど周囲には破面とか死神で沢山。僕と戦闘している内に囲んで潰されるかもって警告だよ」

「へー、でもそれってあんたを一瞬で殺せば済む話でしょ」

これ無理だ。切り抜けられない。

「横槍はいけないぞ？ バズビー」

「何もしねーよ。思考盗聴野郎」

「だそうですけど、どう思います？ アキュトロン師匠」

「バンビエツタ嬢と戦っている彼は仮面の軍勢、加えて彼が持つあの刀、討てばさぞ陛下がお喜びになることだろう。その榮譽を得ようと考えるのは当然のこと。思考だけでは判断できまいよ」

「そういうこった。それにあの野郎は随分丈夫らしいしな？」

横からなんか聞こえるんだけど。師匠って何だよ！ 僕の斬魄刀が何!??

意識が段々逸れていく、だからかいつの間にか飛んで来ていた膝蹴りに対応出来ない。

「ゴアッ!？」

続く一閃を二刀でクロスガードするが吹っ飛ぶ。

「これで終わりねー!」

更に僕へと飛来する霊子弹。バンビエッタ・バスターバインの聖文字は「^{ジ・エクスプロード}爆撃」なだけあってあれは爆発する。

くそッ・避けられな――

だが飛来するそれを紫の極光が掻き消す。

「!」

虚閃か

体勢を立て直しつつ霊圧の感知を開始し周りから幾つかの虚の霊圧を感じ取り辺りを見回すと6体の破面、そして

「久しいな、仮面の軍勢」

「バラガン・ルイゼンバーン」

空にある骨の玉座に座する、白髪の老人、第二十刃がこちらを見下ろしていた。

「フィンドール、ポウ、アビラマ、クールホーン、ヴェガ、ニルゲ、侵入者を討ち、そしてその小僧の手足を腕いで儂の前に連れてこい」

「はッ! 陛下の仰せのままに!」

少し遠巻きに僕達を取り囲んでいた6人が近くに降り立つ。

「その剣、お前がああ時の」

「不意打ち根性無し野郎かア!!」

僕と対面しているのはジオ・オウヴェガとアビラマ・レッダー。両方も黒髪で金眼だがジオの方が身長が低く牙の長い肉食動物の頭のようなような被り物を^レして^{いて}アビラマは筋肉質で上裸、鳥の頭のような形の骨を被っている。

「先日はごめんね、痛かったでしょアレ、傷とか残ってないよね?」

「ごめんねだア!?!? ふざけたこと抜かしやがって!」

「敵の心配とか随分と舐められてるんだな」

「舐めてもふざけでもいな」

僕は襲撃して刺すだけ刺した側で、しかもこれから戦う直前にこの物言いはかなりふざけてないか？ またいつか全てが終わった後に場を整えてもつとちゃんとした謝意を示そう。

「やっぱ何でもない。それで戦うんでしょ？ 始めようよ」

「言ってる途中でやめるんじゃないやねえ!! 気になるだろうが！ 言えよ!!? 煮えきらねえ野郎だな。だが！ そんなお前もこれをすれば熱く。」

「互いを鼓舞する戦いの儀式」か？」

「ああ、お前もやれよ?」

「一人でやってろよ。その間に俺が手柄を独り占めしておくからさア!!!」

「あ、おま!? 待ちやがれ!!」

あ、中断しちゃうんだ。やってみたかったのに。

でも、有難くもある。隊長クラスの聖十字騎士団と副隊長クラスの従属官、力の差は歴然で普通に戦ったら殺されかねない。出来るだけ誰も死なせずに終わらせたほしい早く自由に動けるようになっておきたい。

ジオが刃先が斜めに折れたような形の斬魄刀を構えて突撃してくる。

それをギリギリでジャンプして避け、下側にいる彼に向かって剣を振り下ろす。難なくそれを避けるジオが放つ振り下ろしの一閃を受け止める。

パワーはこっちが上か。

鏢競り合いを剣を弾いて打ち切ろうとするが、

「甘いんだよー!」

その勢いを受け流され頭に蹴りを叩き込まれる。

やるな。流石に、虚化無しじゃキツイか。ここで出し惜しむつもりは無いけど虚化での移動は全て響転になって一步の移動距離が限定される。良い感じに距離を取らないと、取れたら刀剣解放前なら不意打ちの一撃で何とか出来るは――

「頂を削れ」

「空戦驚!!」

「え？」

突如空間の彩度が落ちる。影だ、巨大な翼を持つ影が地面に投射されている。

「どちらも腹の探り合いかよ。情けねえ」

空を見上げると頭になるアビラマの刀剣解放の全容、顔全面を覆う仮面、全身を覆う赤い体毛、赤い翼や体刻まれる黒い模様に加えて鳥の脚、完全な鳥人へと変身していた。

「一対一の決闘に拘るお前が割り込む気かよ」

「あんなモンが決闘？ 笑わせんじやねえよ」

「見ていられなくて体が勝手に動いちゃったぜ」

「ただお前に堪え性が無いだけだろ」

「なあおい仮面の軍勢。お前、名は何だ？」

「海渡町瞳だよ。そっちは？」

藍染や対面した十刃は僕達の情報をごこまで破面達に伝えているのか。取り敢えず名前は聞いておこう。知ってるけど。

「アビラマ・レッダー。バラガン陛下のフラシオン従属官で最も勇敢な男だ」

「俺様と戦え海渡町瞳。戦士として正々堂々全力でな」

「二人でかかって来ないんだね？」

「あり得ねえな、無様が過ぎる」

「拘るね。良いよ分かった、戦ろう」

「良い返事だ。こいつも俺様と戦いたいらしいぞ。手を出すなよジ
オ、今度こそ決闘だ。割り込んだらお前も討つぞ」

「ちツ。」

響転するには距離が近いな。露骨に下がれば警戒されるしまずしはゼロ距離からの虚化狙いで突っ込む！

アビラマに向かって雷撃を放ちつつ突撃、雷撃は僕がいる方向とは全然違う位置から放たれているため両方の対処には二撃必要だ。

さあどうする。

「デボラル・ブルーム餓翼連砲!!!」

刀剣解放したアビラマの翼を鋼以上の固さを誇り、基本的にそれを

放って攻撃を行う。この技は両翼による一斉射撃を行うもの。

その二つを最短で結ぶ直線に垂直になるよう向きを変え限界まで引き絞った両翼を極限まで振り抜く。翼通った軌道上の全てから羽根が翔んだ。

横へ限界まで伸ばして捉える。か。範囲の分威力は落ちるぞ。

瞬時に羽根の到達予測軌道の真上に大質量の水塊を生成し落とす。その質量で軌道は少し下に逸れる。上に飛び越えるように掻い潜り最短コースを駆け抜け、そのまま接近する。

接近戦に応じるならそこで虚化、吹き飛ばされたらその勢いで響転の一步範囲へ下がって虚化すれば勝てる。

そう思い剣を振るが剣先が奴の姿を捉えることは無かった。

速い!!? 霊圧の方向は上!!

次の攻撃に備え見上げたときには既に数多の羽根が目、喉、心臓に突き刺さらんと肉薄していた。

羽根の群れは押し潰すように僕を地面に叩き付け、巻き起こる土煙。

空を舞うアビラマはそれを見て眩く。

「なんだそりや、鈍すぎる。あの日の力はこんなモンじゃなかっただろ。」

一方、土煙の中では全身の修繕を終えた海渡町瞳は思案していた。

真下に落とされたか。後退距離が制限されたからちよい近いな。

藍染が僕の修繕能生を誰かに伝えたかは分からないけど取り敢えずこの土煙があればこちらの場所は分からない晴れない内に下がってここにだ!

虚化し即座に響転、

「なん——」

驚くアビラマを余所に膝蹴り、そこから思考を挟まずジオの霊圧方向へ跳ぶ。煙から出る前に距離は既に把握していたがそれによると一步では届かない。

だからこそ投擲、奴に柄頭がぶつかるように全力で投げる。

浅い . . . !

僕の響転は距離を選べない。少しでも相手がズレたらしつかりと当たらない。あの時のアビラマは驚くと同時に少し退いていた。剣で斬るのは過剰火力だと判断し足を使ったもののリーチ不足となり、

ジオへの投擲に関しては練度不足で軌道が逸れた。
「く、そ、不意打ちのために温存してやがったのか、どこまでも姑息な野郎だ!!!」

胴に描かれた紋章を爪でなぞると噴き出す赤い光、増える翼、変化する仮面の模様。これは噴血デボラル・エルフンオン餓相と呼ばれるらしいアビラマの第二の変身だ。

「喰い千切れ」

ティグレストルク
「虎牙迅風」

「一撃ももらったんだ、もうお前の遊びには付き合わないぞ、俺がこいつの手足を挽いで、バラガン様に献上してやる。」

ジオの刀剣解放、これはマズイ、怖いけど試してみるか新戦法!

先に狙うのは決闘中のアビラマだ。

全速力での突撃を敢行するアビラマを回避、接近のため響転をしながら右腕の剣で自分の右手、両足、胴を斬り離す。

「ぐッ」

響転は特殊だが歩法、前進だ。切り離れた分それだけ軽くなり、速くなる。

「!?」

伸ばした左手はアビラマを掴み、土手っ腹に頭突きを叩き込む。

「ごはッ」

地面に落ちたアビラマは気絶したようで動かない!

後は、滅却師と戦ってる破面の霊圧が、ジオは一旦後回しだ!

響転で最も霊圧の下がった破面へ向かう。

あれは、ニルゲ・パルドウツクとバンビエッタ・バスターバイン!

ボロボロになって気絶したニルゲに向かって霊子弹が今にも打ち込まれようとしていた。咄嗟に雷撃を放ちそれに直撃させる。

あれは何かに触れたら爆発するタイプ、これなら着弾前に作動してくれる筈。

目論み通りに雷撃の直撃で軌道の逸れた霊子弹は爆発、ニルゲはそれによる傷を負っていない、バスターバインにもほとんど当たっていない。二人の間に入りニルゲを連れていこうとするが、

「それなら纏めて消し飛ばしてやろうじゃない！」

自分の爆発を軽く受けたバスターバインは怒り心頭といった様子で更なる霊子弹を差し向ける。

まずい！ 僕が殺されて意識が飛べば、ニルゲが集中しろ！ 誰も死なないことだけを考えて全てを削ぎ落とせ！

右手でニルゲを向こうへ突飛ばし、自分の首を落とす。元々の斬魄刀での再生と虚化による超速再生によって再生速度は跳ね上がっている。爆弾の着弾より先に肉体を再生、首がなくなった肉体を即席の盾とした。

「何よそれ！」

ニルゲを掴んで跳ぶ。

息を吐くな、次はバズビーとシャルロット・クールホーン！

黒い茨が二人を包んでいる。白薔薇ノ刑ロサ・ブランカという技、クールホーンが使う相手の霊圧を吸収し相手を死に至らせる。

減っているのはクールホーンの霊圧ということは

黒い茨が弾け飛ぶ。内にいたのは無傷のバズビーと火傷まみれのクールホーン。

雷撃、ウォーターカッター、熱線を放つ。虚化時でもあまり出力上昇の恩恵を受けていない斬魄刀の力だが数があれば――

「バーナーフィンガー2」

炎の線が僕ごとそれらを風ぎ払う。

「オイオイ、腰を折るなっつったのはどいつだったよ」

身体は両断された。だが瞬きより速く再生、そのまま突き進む。それを見てバズビーはバーナーフィンガー2の縦一閃を放つが

空を斬る。

「！」

回避をしたわけじゃない。ただ僕の周辺の光を曲げ誤認させた。さつき両断された時は炎の到達速度を調整して見せかけ、自分が両断された姿は描けないので僕は自分の炎系の斬魄刀で身体を二つに夕イミング良く割って誤認させた。

バズビーを通り過ぎクールホーンを掴み移動を開始。

次はアキュトロンとポウ。

巨大化の能力を持つポウと武器が霊子銃だけのアキュトロンでは相性が悪いようでアキュトロンが一方的な攻撃を続けているが面積的に穴だらけではあるが何とか無事なようだ。さつきから破面を回収して回ってる僕を見ていて予測が出来ていたようでこちらに銃口を向けるアキュトロン。

しかし、さつきの景色ズラしに加えて景色をバラバラに歪める。ここまで複雑な光の操作はそうそう出来ないためか頭が痛い。だが何とかポウの元に辿り着き二度の蹴りで気絶させると刀剣解放が解除され小さくなったので抱えて移動。

ガブリエリとフィンドール・キャリアス。

「遅かったじゃないか。ほら、彼はお好きにどうぞ」

まるで待っていたかのような口振りでちようど今倒したフィンドールを手放すガブリエリ。

何だコイツ。いや、考えるのは後だ！

フィンドールを脇に抱えて最後の一人へと向かう。

「何がしたいんだよお前。まあ良いさ、俺はバラガン様の望みを果たすだけだ」

「アビラマを倒した強さは認めてやるよ。だけどな本当の力を隠していたのは俺もだ!!!」

ジオの全身の筋肉が膨れ上がる。これはティグレストロク・エル・サーブル大剣という彼の更なる力だ。

「両腕も使えない状態で勝てると思うな!!!」

「虚閃」

こちらへ迫る赤い光線を蹴り上げる。

「終わりだ！」

その間に接近していたジオが僕の脳天をかち割る。

「お前の弱点は頭なんだろ、脳だけは常に直撃を避けていたのが見え見えなんだよ」

「まあ弱点だけだからといって殺せるわけじゃないよ」

一瞬の思考の空白を挟んで再生しジオの鳩尾を蹴り抜く。

「ま、だ」

更にもう一発打ち込むとようやくジオは沈黙した。

4人は手で持てたけど後二人はどうする？ 足は響転に使うから抱えれない。いや、ならスペースを作れば良い。

一度両脚を落として再生、切り落とした脚の爪先と付け根を背中に剣で刺して固定し、間の空間に二人を引っかけてここにいる滅却師達が正確に把握出来てないであろう地下に潜り込み隠して更に光の操作で視認を不可にする。

「はあ・はあ」

そこで集中の糸が切れた。

首は・手は・足は・繋がってる

思い返すだけで冷や汗が止まらない。虚化の力をほとんど使いきった影響か身体も震えている。

死なないにしても痛すぎる。でも、この戦いじゃ誰も死んでない、それなら良い。殺すのは怖い。死が怖い。親父みたいに消えて欲しくない。だから僕の力全て使って死を遠ざける。

次はバラガン対滅却師。持つか？ いや、持たせる。

光の操作で自身の位置を誤魔化しつつ地上へと登っていった。

番外篇

二章までに登場したオリジナルアイテムとその周りの設定あと短編

・鬼道代行装置

詠唱を靈力を一切持たない人間でも行える形式に落とし込んだもの。開発された当初は巨大化やら色々問題があったが現在では粗方解決、発動もボタン押しで簡単だが出力は無詠唱に劣る。詠唱の再現は難しくかなり構造が複雑化しており量産は困難。

本作主人公の父親である海渡町再二は靈力を使用することが出来ないが戦う術は必要としていたので協力関係にあった浦原喜助に頼んで造ってもらったもの。

その為元々は弾倉型靈子タンクを装置に装填して利用されていた。しかし今は主人公達の内に靈力を持たない者がいないため装填箇所
に靈子送口を設けて直に自身の靈子を送り込めるタイプに改良されている。

・汎用靈子利用装置

死神は周辺の靈子を使い足場を作るがそれを浦原喜助が鬼道代行装置のついでに機械的に再現したもの。元々の機能はそれだけというか弾倉型靈子タンクに靈子を補給するためだけのものだったがそのかなり後、再二はそれに小さな鬼道代行装置を外接したりすることで本編一話で登場した靈子砲が完成した。

・虚用スタンガン

またまた再二の頼みによって誕生したアイテム。靈力の一切無い彼は虚の探知レーダーを持っていたとしても動く虚を肉眼では見えていないので攻撃を当て続けることが困難だった。だから一撃当てればそのまま撃破が確定する相手の動きを止める武装が必要だった。

浦原喜助は仮面の軍勢を救った時に虚に対する多くの知見を得ていた。そのデータを用いて靈子により作られる身体の組成を解析していき毒となる物質を造り完成させた。弱い虚や弱った虚にしか効

かない。

加えて再二がナナナ・ナジャークープの聖文字「無防備」が行う霊圧配置を観測しその弱点を突いて霊圧を麻痺させる力を伝えたことでその理論を用いて開発された武装も内の少数には内蔵されている。

尚、霊圧配置の正確な把握には時間がかかるため基本は毒しか使わない。本編では剣にも搭載され虚夜宮内に侵入させる際に周りを周辺警戒の虚をゴリ押しで寝かした。

・霊子マシンガン

前述した弾倉型霊子タンクを装填して霊子の弾丸をばら蒔く武器。ちよつと照準が逸れてても当たるように弾がバラける。再二の主兵装。普段は機動砲台とかに搭載されている透明化の鬼道代行装置を使つて隠している。既に今は存在しない。

・機動砲台

前述の武装達は結局強敵と戦うことは出来ない。またまた再二は浦原に頼み込んだ。透明化して霊圧も遮断出来て逃げの手、奇襲の手の黒腔展開装置完備。ここまでは良いのだが弾倉型霊子タンクが嵩張るせいで装弾数が落ちる、即ち最大火力が落ちる。その改良を終える前に再二は死んだ。黒腔発動に使う二つの起点は内部に搭載されている。

短すぎるのでちよつと短編日常回くつ付けます。時間軸は本編開始半年後。

毎日練習が行われる訳じゃない。それは流石に身体に悪い。今日はそのような休みの日の朝、寝惚け眼を擦りながら歩いていると鳳橋さんを見かける。

「おはようございます鳳橋さん今日も散歩ですか？」

鳳橋さんはよく散歩に出かける。平子さんに聞いたところそれは目的無く行われるらしい。

散歩って面白いの？

そう思っ僕は散歩に着いていってみようと考え話しかけてみた。

「グッモーニン瞳。その通りさ」

「あの、僕もそれに着いてって良いですか？」

「構わないよ。でも珍しいね」

「そうですか？」

「ああ、キミって休みの日まで根詰めて練習とかしてたじゃない。だからこういうのは好まないのかと思っいてね」

「あくでしたねそういえば。ここに来てから僕、皆に闇雲に根詰めるだけじゃ成長出来ないっって言われてたじゃないですか。でも最初は半信半疑だったんですよ」

「ここに来るまでそういう練習を重ねて6年、ちょっと僕は自分の練習のやり方にプライドとか持ったりして。だから検証してみることにしたんです。鍛えてくれる人が一巡する度に詰める、詰めないって感じで」

詰めない時も最近までは手癖で無意識に近い感じで練習しに下に降りたりちよっど練習しちやったりしてたし周りからは分かりづらかったんだらうな。

「それで気づいたんですけど詰める時と適度に休みを入れる時で成果があんまり変わらなかつたんですよ。なんで休みは訓練以外のことでやりたいことをやろうと思って」

「そうだったんだねえ！ 良い心掛けじゃない！」

「あはは、じゃ行きましようか」

僕、今思えばめっちゃ時間無駄にしてたんだな。悲しい。

散歩、外を歩いて気分転換するとかそんな意味だったような気がする。

歩いてみると何となくその意味が理解出来る気がする。目的が、目的地があつてそこに向かう時というのはそれへの思索を巡らせる。だからこそ道端に、木に、空に目は行き届かない。けれども目的が無いのなら普段は向けない隅々に意識を向けることが出来る。

目的や展望が介在しないそれらに傾注する瞬間には人生の内に生まれた重責とかみたいなのを忘れていられる。それが気分転換となる要因なのかもしれない。

道端とかあんまり見てなかったから何か真新しく感じる
「良いものですね、散歩」

「気に入ってくれたみたいだね！ ボクも散歩が好きだよ。毎日外を見回る度に少しずつだけ確かな変化が見られてねえ。同じ道でさえ1日後には新しい音色を聞かせてくれるんだ！ 世界は芸術で満ちているってコトだねえ！ ボクにとって散歩はねそういう変化を見つめるために行つてるんだよね」

「そうなんです。興味深いです」

僕とは大きく異なる物の見方だ。鳳橋さんから見た世界はどうなっているのだろうか？ 全てが音楽へと繋がっていく様になっているのだろうか。それとも世界が音楽そのもの？ 何にせよそういう世界の見え方があの正解を生んだんだろうなあ。

僕が見てる世界より綺麗なのかな。

考えると気になって来る。彼の価値観を体験してみたいがどうすれば良いのだろうか。

うくん・あ、僕も楽器弾いてみよう。それならちよつとは分かるかも。

「唐突に話を変えるんですけど僕に音楽を教えてくださいませんか？」
「興味を持つてくれたのかい！ 嬉しいよ！ 何か弾いてみたい楽器はあるのかい？」

鳳橋さんはバイト代を溶かして楽器を買っている。仮面の軍勢の潜伏期間はかなり長いがその間ずっとそうしていたらしいので楽器

は沢山持っているようだ。

弾いてみたい楽器かあ。確か聞いたことある中で良さそうなのは

「ギターです」

「ギターか！ 良いねえ！ 帰ったら早速、練習してみるかい？」

「はい！」

とても楽しみだ。いつか一通り戦いが終わったら楽団「仮面の軍勢」とか結成したいなあ。皆はどう言うか分かんないけど。

三章ローズ視点、各隊長の状況

仮面の軍勢が転移させられた直後からです。

「仮面の軍勢オオオオ!!!」
「!」

ロバート・アキュトロンが放った未知の攻撃を受けて仮面の軍勢は離散したという状況を把握した瞬間のことだった。

真上から雄叫びが鳴り響く。

認識した瞬間にもその背中側上空からの音は大きさを増していく。ローズは咄嗟に声と直角方向に飛び退き近くの建物の屋根に乗る。直後、地面を砲撃のような衝撃が揺らし地を割る音が木霊する。それに巻き上げられた土煙を腕の一振で払い襲撃者はその姿を顕にした。3 m以上はあるであろう巨軀に全身に生える体毛、まるでゴリラのような姿をした白髪の聖十字騎士団。名をジェローム・ギズバットと言い、原作では十一番隊隊長更木剣八に一太刀で殺害された男だ。

彼の聖文字は確か――

“ザ・ロケ 咆哮”。

大猿に変身し咆哮によって発生した音の振動で攻撃する能力で護廷十三隊の一般隊士なら聴くだけで頭が弾け飛ぶ威力を持つ。

ガバツ、とギズバットは技を放つために口を大きく広げ、叫ぶ。

その音はまるで物質のような重さを持ち、触れた側から破壊していく。

建物を、地面を壊して壊して壊して進んでいく、彼の周りに球形の新しい空間が生まれていくようだった。

「奏でろ」

「金沙羅」

それを真正面から打ち落としたのもまた音だった。解号で出現したローズの始解「金沙羅」の鞭部分を彼が指で打つとギズバットの放つ形を得ていないそれとは真逆の旋律を奏でて生まれたそれで対消滅させたのだ。

「ゴアアア!?!?!」

「残念だったねえ。音を司るのはキミだけじゃ無いのさ」

ギズバットが自分の能力が効かなかったことに驚愕している間にもローズは動きを止めない。金沙羅が空を駆け、瞬く間に巨軀を捉える。

そして再び金沙羅を打てば先端の花を象る装飾からの爆発がギズバットに炸裂する。

「グウオオオアアアアア!?!?!」

チリチリと焦げた体毛にどす黒く残る焼け跡、効果は明白だった。しかしこれは一般的な聖十字騎士団ならあり得ないこと。

静血装は使えないみたいだね。

未来の知識こと原作情報にはジェローム・ギズバットという男の詳細は無いに等しかった。分かるのは能力のみ、滅却師の力はそれだけでは無いからこそ警戒していた。その内でも特に厄介なのが静血装、隊長の始解すら無傷で耐えるという凄まじい防御力を誇っている。

始解以上の手札が時間的制約のある虚化や音が聞こえる存在を無差別に魅了し作用する卍解しかないローズにとっては有難い相手だった。

金沙羅の長い射程と軌道指定機能を用いた一方的な攻勢が始まり連撃がギズバットを追い詰めていく。

「勿体ないねえ、キミの卍を洗練させれば良い芸術を　　ッ!？」

「ベレニケエエエエエエ!!!」

その叫びは能力の行使の為のものでは無かった。突然ローズから意識を外しているように感じる怒号に呼応するように光を放つ紋様が腕に迸る。

「血装だって!？」

静血装なら既に使っている筈。ならこれは――

動血装を用いて放たれたのはただの拳撃だった。小細工は見えない上ローズはそれの攻撃直線上にいるが距離的に確実に当たらない破綻した行動に見えた。

だが

拳が撃った空気が荒れ狂い空間を割り砕くような炸裂音を伴った暴風が吹き荒れる。

「ぐッ!？」

想定外の事象に対処が遅れ直撃を受けたローズを連れて進む風は五棟の建物をクッションにしてようやく止まった。

「なんてパワーだよ。さっきまでは手加減してたって言うのかい。」
のし掛かる木材を撥ね飛ばし起き上がるが身体中にビリビリとした痛みが走り少しよろめく。規格外の出力の動血装、これ以上喰らえば死ぬと確信する。

「まあ、それはこっちも同じだけどね!」

だからこそ虚化という手札を切る。

仮面の出現と同時に跳ね上がった身体能力を用いた高速戦闘に切り替える。動血装で向上するのは威力だけ、仮面無しでもギリギリ対応は出来ていたのだからこの状態ならギズバットの認識を越えられない。

一撃、二撃、ギズバットの拳が振るわれる度に起こる破壊は景色は大きく変容させていく。しかしそれとは対照的に二人の状況は変わらなかった、攻撃を紙一重で避けながら攻撃を加えるローズ。

危機感を持ったギズバットは更なる一手を戦場に投じる。動血装と聖文字の合わせ技、一方向しか狙えない打撃とは打って変わった超

高威力のオールレンジ攻撃。

咆哮を轟かせようとするヤツの喉元には光る紋様。

「させないよー！」

瞬時に危機を察知したローズは金沙羅でヤツの顎をかちあげる。

「グムウツ!？」

よろける巨体、これを好機と見て金沙羅を放つ。

「なにやってやがんだよ」

トップスピードで突き進む金沙羅を光の槍とも言うべき巨大な光の矢が撃ち落とす。

「これじゃ鍛えてやった甲斐がねーぜ。つれーなあオイ」

ドリスコール・ベルチ、顎髭の目立つ眉なしでギズバツト程ではないがかなりの大男が呆れた声色で独りごつ。

彼は原作にて副隊長を圧倒し隊長で圧倒的最強の一番隊長の山本元柳斎重國に瞬殺された正確な力の推し測れない存在。聖文字は

〃〇〃の〃ジ・オーヴァーキル大量虐殺〃殺せば殺すほど強くなる力だ。

「けどよ、仮面の軍勢を見つけた分はプラスにしといてやるぜ。コイツらは曰く付きだ、倒しやあ陛下もお喜びになるからよお」

「下がって休んでろ」

「曰く付き？ 随分警戒されているみたいだね」

「心当たりがねーってのかよ。嘘だろオイ！」

ローズの言葉を聞くと途端に嘔き出すように嗤うドリスコールを見て訝しむ。

仮面の軍勢が目をつけられるとしたら、それは藍染を襲撃したあの日だろうけど彼らはボク達が影の監視を知っているなんて情報を手に入れていない筈だよな。でも知っていたとしたらボク達の先手を封じたことも納得出来るね。

「無いよ。キミ達とは初対面じゃないか」

「知らされて無かったのかよ。同情しちまうぜ！」

ここで話は打ち切りとばかりにドリスコールが2本の光の矢を投擲する。

上に回避して金沙羅を放つが光の槍に撃ち落とされる。

「もう一丁ウー！」

ドリスコールは両手に嵌めたメリケンサックから光の槍を造り上げる。そのため空いた片腕での即座な2本目の追撃が可能となっている。

「金沙羅！」

ローズが声を掛けると今にも地面に激突しそうだった金沙羅の穂先が直角に曲がりドリスコールに直行する。

「なんだそ——どわッ!？」

穂先での突撃とそれから発生した衝撃波での二段攻撃が炸裂する。

「イテーな。気味の悪い軌道しやがって。」

直撃箇所には静血装の光る模様が浮かんでいるがお構い無しとばかりに黒く焼け焦げている。

「金沙羅の力の源は旋律、それを介せば無理なんてないのさ」

その言葉を聞いたドリスコールの大笑いが響き渡る。

「そのちんけな音が力だあ？　　ったく手エ抜いてた俺に一撃浴びせたぐらいで粋がりやがってよオ」

大気を震わせて出現する霊子の翼。その翼は8対、加えて全ての形が異なっていてあまりに異質だった。

完聖体——！

「力つてのはなあ!!　他人の生き血を啜って得るものだろうがよオ!!!」

光の槍ではなくただ腕を振るう。それだけで水、炎、雷、風などの様々な事象がローズを叩き潰さんと全方位から殺到する。

金沙羅を使いなんとか脱出できる穴を作り飛び出るがそこに向かって前より更に巨大化した光の槍が既に放たれ避けられない位置にまで接近していた。

まず——

「双鱼理！」

その間に間一髪、割って入る男がいた。白髪長髪の十三番隊長、浮竹十四郎。その手に持つのは柄頭で繋がった2本の逆十手状の刀の片方を光の槍に差し向ける。

「隊長かよ、だがそんなんで防げ——」

刀の刃先が槍に触れるとその瞬間、その方向が反転する。

「あア!？」

直撃し遠方へと飛んでいくドリスコールを背景にして振り返った浮竹が話し掛ける。

「久し振りだね、鳳橋君」

「浮竹さん」

.....

「あー、何時まで追ってくんだよテメエらは」

「貴様を討ち卍解を取り戻すまでに決まっているだろう」

シヤズ・ドミノと碎蜂の戦闘は続いていた。速さでは碎蜂が圧倒していて攻撃は当たらないが空にいるヤツに到達する為の霊子の足場を分解されて追いつけない拮抗状態。

「ま、どっちでも構わねえか。居ても居なくても変わんねえもんなテ

メエは」

「貴様」

「テメエの卍解で技術開発局が無茶苦茶にされる様を指でも啜えて見てやがれ」

ドミノは真っ直ぐと十二番隊が造った技術開発局へと向かっている。それに碎蜂は焦りながらも対策を考えているとトスと頭の上になんか当たったりその感触が溶けるように消える。

「何だ、今」

「あ？　　ほッ　　なん、だ」

意味不明な声を発する碎蜂に振り返ろうとすると咳をつく、ドミノは反射的に口元を押さえると違和感を覚える。そこに不可解は無い、飛沫を抑えるために必要なことだ。しかし少し手が重かった、違和感はそのにあった。

手の平から赤い液体が溢れ落ちる。

ガクリと体から力が抜けてドミノが墜ちると同時に碎蜂は自らの斬魄刀から失われた魂が、卍解が戻ってくるのを感じる。

まさか、これが――

少し前、何者かの「天挺空羅」により敵の情報が転送されていた。あまりの不審さから信じていなかったがそれによると侵影薬という卍解を取り戻す物があるらしい。信じるのはあまりに癪だが他に形容出来なかった。

だが、それよりも

「く・ツそが・何が起こりやが――」

「雀蜂雷公鞭」

腕を黄金の装甲が覆い、先には巨大なミサイルが装填されている。

「なッ、嘘だろ待ちやがれ！」

高熱を伴いスラスタで加速していくミサイルが爆発する。

三章の護廷十三隊各隊長状況

・ 一番隊 山本元柳斎重國

ユーハバツハと対面し敗北。

・ 二番隊 碎蜂

シヤズ・ドミノと対面し撃破するが復活され逃げられる。

・ 三番隊 市丸ギン

ベレニケ・ガブリエリと対面、勝敗は着かず。

・ 四番隊 卯ノ花烈

原作通り戦闘なし。

・ 五番隊 藍染惣右介

謎の聖十字騎士団（次々章で詳細書く）と対面し撃破、その滅却師は死亡。

・ 六番隊 朽木白哉

原作通りエス・ノトと対面し卍解を奪われ死にかけるが侵影薬が届

き撃破。

・七番隊 狛村左陣

バンビエツタ・バスターバインと対面。

・八番隊 京楽春水

原作通りロバート・アキュトロンと対面。

・九番隊 東仙要

狛村隊長と同じくバンビエツタ・バスターバインと対面し卍解を発動させるも彼女の完聖体に撃破される。

・十番隊 日番谷冬獅郎

バズビーと交戦。

・十一番隊 更木剣八

原作通りロイド・ロイドを撃破しユーハバツハに敗北。

・十二番隊 涅マユリ

ペペ・ワキャブラーダと対面。

・十三番隊 浮竹十四郎

ローズと共にドリスコール・ベルチと対面し拮抗。